
闇鳥のナキカタ

式織 檻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇鳥のナキカタ

【Zコード】

Z3950E

【作者名】

式織 檻

【あらすじ】

チームを組んでるロットとルーに引きずられ、ギルドの仕事に精を出す日々 もいよいよ佳境。秘密結社『カザミドリ』に名指しで宣戦布告され、俺達の行く末は一体どっちなのか、何よりも誰よりも俺自身が知りたいんだが……。

プロローグ（前書き）

本作は「闇鳥のトビカタ」「闇鳥のウタイカタ」に続く三作目となつております。先に前二作をお読みいただくことをお奨めいたします。

プロローグ

「あなたは……今まで……何人の人間を……殺したことが……ある……の？」

閉店間際の閑散としたレストラン。

テーブルを挟んだ向かい側で、白いショートヘアを揺らしている少女　ワイト＝ホール　は、まるで世間話でもするかのように、何の前置きもなく、何の前触れもなく、何の予兆もなく、そんな唐突な質問を俺に投げかけてきた。

どうしようもないほどに虚をつかれた形になつた俺は、こんな危うい会話を他人に聞かれやしないかと周囲を気にしつつ、それと並行してなるだけ冷静に頭の中で文を構築しながら、

「何人？　

」つて、いや、まあ、確かに俺は殺し屋もどきではあるが、実際のところ俺が俺の意思で俺の体をもつて俺自身のために人を殺したことは、一応、今のところはないな。だが、間接的になら　　一度だけ。ほら、この前の、カザミドリ十三番隊壊滅作戦の時だ

「そう　　直接……といふなら……それは私も……同じ。……私自身が望んで……他者の命を奪つたことは……一度も……ない。……一度だつて……ありはしない。……でも　　」

ワイトは、目の前のグラスに入つたジンジャーホールを一口だけ含み、

「私の体は……今まで……数え切れないほどの人間を……殺して……きた。……命を奪つて……きた」

「……『体は』？　そりやつまり、無理矢理やらされたってことか？」

「そう」

ワイトはゆるやかに頷く。

「『ツバメ』の性能を試すため、その攻撃を無抵抗な人間に加えてきた。斬つて突いて刺して裂いて焼いて燃やして消していくうるすべての苦痛を他者に与えてきた。他者の存在を消してきた

「でもそれは、お前が望んだことじゃないんだろう？お前の意思じゃないんだろう？ だつたら、それはお前が気に病むことじゃないんだろう。悪いのはカザミドリだ。お前じゃない。お前に非はない。お前の腕には不愉快な感触が残ってるだろうが、だからこそ、それを戒めとして」

「違う」

俺の発言をさえぎり、ワイトは首を横に振った。

「それは私も分かつている。承知している。

私が逡巡しているのはそこじゃない。そこじゃなくて、その事象が原因で私が私自身が私の存在が他者によって

否定される」と

「否定される？」

俺は、文脈から飛躍して登場した単語をそのまま聞き返した。

ワイトはあごを縦に動かして、

「そう。私は今まで数え切れないほどの拒絶を受けてきた。私の性能が発動するたび私は否定され続けてきた。たとえ精神を閉ざしても彼らの怨言はどうしても耳に届く。耳に残る。彼らの悲涙は視界に入る。視界に映る。その度に私の存在が間違いであることを気付かされる。思い知らされる」

ワイトはうつむき、右手でもつて包帯が巻かれた左腕をぎゅっと

握り締めながら、

「私は……買われる以前から……一度も……存在を……肯定されたことが……なかつた。……そんな経験が……なかつた。……そんな存在が……いなかつた。……あなたや……ウェリイに……出会つ……まで。……なのに……あの時の私には……自分を殺す自由がなくて……心を殺す術を知らなくて……ただ……ただ……恨まれて……きた。……呪われて……きた。……否定されて……きた。……拒絕されて……きた。……あなたやウェリイに……出会つたことで……改めてわかつた。……改めて……思った。……あの……殺戮の……時間……虚無な……時間……無為な……時間……苦痛の……時間……」

その水面のような瞳を前髪で覆い隠して、

「……もつ……嫌だ」

ワイトは怨嗟のようご、元氣りと、声にした。

そして顔を上げ、俺の目を直視して、

「私は……命を懸けて……あなたを……守る。……あなたのためにすべてを……投げ出す。……できることは……すべて……やる。……あなたに何をされても……私は……そのすべてを……受け入れる。……抵抗せずに……黙認……する。……心も……体も……すべてを……差し出す。……あなたの好きに……して……いい。……自由にして……いい。……だから……だからだから……あなたは……あなただけは……私を……否定しないで……拒否しないで……拒絶しないで

「私のことを……見限らない……で」

第一話

昼下がりの喫茶店。

穏やかな午後の時間をお茶でも飲みながら満喫しようと集まってきたんだろう、なかなかの人数の客が、あちらこちらの席でガヤガヤと話しこんでいる。見たところ、客層は主婦や若人が主。……まあ、平日この時間にすることがないのは、その辺りの人間だろう。俺はガラス越しにそんな店内の状況を確認しつつ、店の中に入つていった。

別に俺は、紅茶片手にゅつたりと時間を過ごすためにこの店に入ったわけじゃない。現在の俺にはそんな余裕はないのである。できるだけ早く、ギルドでリストを睨みつつ次の仕事を決めなければならぬのだ。

それでも俺がわざわざここに来たのは、よつは呼び出しを食らつたからである。その呼び出された相手というのが、これまた意外で

「 ダルク、こっちですわ」

奥の方の四人掛けの席で、俺に手を振つてくる奴がいた。ロール巻きの金髪に、黄色いドレスをまとつた女の子 ウェリィである。

俺は呼ばれるままにそつちへ向かい、ウェリィの向かい側に腰を降ろした。

イスにふんぞり返つていたウェリィは、俺の顔をじとじと見つめると、

「……まったく、遅刻ですわよ。女性を しかも、よりによつてわたくしのことを 待たせるとは、あなた一体何様ですか？」
つんとした声で言つてくる。

店内の壁時計を見ると、針が示してある時間は一時三十分二十八秒。

約束の時間は一時半だったんだから

「 遅刻つて三十秒だけだろ。それに俺だって暇じゃないんだ。

そつちが呼び出したんだし、お前にそこまでなじる権利はない

「で、今日呼び出した用件ですが」

……俺の主張を軽快に無視しやがった。

「 まず、ワイトの件については、あの娘の左腕は

「 ……ああ、昨日直接聞いたよ。義手をつけるんだろう？」

「ええ。業者にはすでに発注していて、来週には完成するそうです。ですので、その取り付けが終わるまで、あの娘はしばらく仕事に参加できなくなります。……というか

ワイトは眉をひそめて、

「 あなた達、わたくしの知らないところでようも頻繁に会っているようですね？ 別にとがめるつもりはありませんが、あなた、そのつもりならば、あの娘のことをしっかりと考えなければなりませんよ？ 人生も将来のことも。早急に女性一人を養っていく甲斐性をつけてください

いやいや、それは話が飛びすぎだろ？」

「 ……しかしあま、この前のことについては、あの娘から聞きました。その背景も。もしあの時、家にあの娘一人だった場合、一体どうなつていたか分かりませんでしたからね。ですから、同じチームのメンバーとして、一応あなたに礼は言つておいてさしあげましよう ありがとうございました」

あごを引いて、会釈のような仕草をするウヨリイ。

……ここまで尊大なお礼なんて初めてだ。まあ、こいつにお礼を言われること自体がレアなことだがね。知り合つて一年の付き合いだが、これが初めてだ。

「 というか

「 それだけのために俺を呼び出したのか？」

「違います。本件は別です。今日あなたに来ていただいたのは、人

に　　あ、来ました」

ふと、ウェリイは俺の背後、通路の方に視線を動かした。

誰が来たのかと振り返ろうとしたところで、ジャラジャラと軽金属がぶつかる音が俺の耳に入ってくる。

そしてその金属音が俺の横を通り過ぎ、いよいよ俺の視界に、そいつが入ったところで、俺は全身の筋肉を強張らせた。それは、Tシャツにサンダル、チャーンを首にまきつけて、黒いニット帽の脇から紫の髪をはみ出させた、卑しくいやらしい笑みを浮かべた男

イヴアリー＝シャルだった。

「や、元気してた？」

俺の向かい側、ウェリイの隣にどっかりと座りながら、イヴは晴れ渡る午後にふさわしい陽気なあいさつをしてくる。

しかし俺は、反応できない。

「ふはは、一週間ぶりくらいかな。まさか、オレのこと忘れたなんてことはないよね？　あれ、結構インパクトの大きい現場だったもんね」

まだ俺は、反応できない。

「あいつも一応元気なんだってね？　いや、失敗例としても、元所持者の一人としては、あいつの行く末はある程度気になつたりもしてるんだ。もちろん、興味としての範囲でだけどさ」

やはり俺は、反応できない。

「……というか、どうしたの、我が親愛なるダルク君？　元気ないねえ。反応薄いよ？」

どうしても俺はイヴに対しても反応できず、その隣のウェリイへと視線を動かして、

「……ど、どうこうことだ？　なぜお前が、こいつと知り合いなんだ……？」

「別に、知り合いというわけではありません。わたくしといつは、ただの——」

「元カノさ」

ウエリィの声にかぶせ、イヴがにたり笑いで言つてくれる。
しかしウエリィは、その笑顔をわななきながら睨みつけ、
「で、でたらめを言わないでください——。いつわたくしがあなたなんぞと——」

「だつて、デートしたじゃん」

「してません！ ただ二、三度食事に付き合つただけです！ 断じてデートなどではありますん！」

いきり立ち、ツバを飛ばしながら叫ぶウエリィ。

それを受けらけらと笑つて眺めるイヴ。
俺は双方の反応の違いに戸惑いつつ、

「……どうことだ？」

「どうもこうもありません！ 以前からわたくしはこいつの顔と名前を知つていたという、ただそれだけのことです！」

「……でも、何でお前がこいつと？ だつてこいつは、カザミドリの——」

「ですから、わたくしが それを知る前に、仕事で知り合つただけです！ ……こいつらの常套手段なのですわ。正体を明かさないまま将来有望な人間にそれとなく近づき、そして——」

「勧誘する」

再度、イヴがウエリィの発言にかぶせてきた。

「……勧誘？ つて、まさか、カザミドリに？」

「そうや」

悪びれる様子もなく、イヴはこくりと首を縦に振る。

「一年くらい前かな？ オレはウエリィにアプローチをかけてたんだ。オレの隊の副隊長っていうポストを空けてね。でも、見事にフラれちゃったのさ。両方の意味で。そりやあ、もうショックだったよ。初恋だったし。半年間にわたるオレの努力が、見るも無残に碎

け散つたんだから。それから数ヶ月、食事がのどを通らなかつたよ
苦笑しながら説明するイヴ。しかし俺には、その表情が演技にし
か見えない。

俺は再度、コップの水を口に入れているウェリイの方へ顔を向け、「……いや、以前からの知り合いだつたとしても、こいつの本性
が分かつていながら、ようもお前はこいつとの付き合いを継続で
きるな。悠長にこいつの隣に座つて。……分かつてるのか？　こい
つがワイトをあんなにした張本人なんだか」

「これが『悠長』に見えますか？」

そう言いながら、ウェリイは右手に握つたコップを俺の方に差し
出してきた。

高さの七分目までみなみと入つた水。その水面を見ると
小刻みに波打つていて。……ウェリイの手が、震えてる？

「わたくしの神経はいたつて正常ですわ。こいつのそばにいるだけ
で吐き気をもよおしますし、ワイトの世話役として怒りも覚えてい
ます。……しかしわたくしは、このイヴァリーの本性を知つてゐる
からこそ、必死に感情を自制しているという、それだけのことです
「ウェリイはかすかに声を震わせながら説明してくる。

しかしイヴは、緊張も激情も微塵もないような聲音で、

「まったく……ウェリイってば、『イヴァリー』だなんて他人行儀
だなあ。普通にイヴって呼んでよ。ねえ？　前はそう呼んでくれて
たじやん」

「……不可能ですね。あなたの本性を知つてそれでも愛称を用い
るなんて、まともな人間の所業ではありませんわ」

……少々耳が痛い。しかし自分から見ても、俺が社会一般から見
てまともではないことは否定しようもない真実なので、反論はない。
いや、今気にするべき問題はそこじゃない。そこじゃなくて

「なぜお前が、再び俺の目の前に現れた？　何が目的だ？」

「いや、情報屋のムツナつち伝いで、ウェリイからオレに連絡
とこうより、この前のことの確認　が来てさ、その際にウェリイ

と君が知り合いだつてことも聞いたんで、呼び出してもうつたんだ」「で、用件は？」

「ふはは。そんなせつつかないでよ。もつと会話を楽しもあ、もしかして時間無いのかな？　この後用事あるの？　だつたら悪かつたね。よし、分かった。味気ないけど、早く本題に入らう。……ええとね、オレが聞きたいことは、まあ至極単純なことだぞ、君はイエス・ノーで答えてくれればいいだけなんだけど、つまるところの我が敬愛するダルク君、君さあ

カザミドリに入らない？

テーブルにひじを乗せ、あごの下で手を組みながら、「冗談めかした口調をすべて消し切つて、静かに、イヴはそう言つてきた。

しかしそれに対する俺の返答は、確認するまでもなく分かりきつたもので、

「…………嫌だよ」

「拒むなら、オレは君のことを実力行使で連れて行く
脅しても？」

「この前、俺に潜伏を見破られたのはどこの誰だ？　俺とお前にはそこまで圧倒できるほどの実力の差がないことは、お前も分かってるんじゃないのか？　俺を殺しにかかるてきて、お前も五体満足でいられると思つてるのか？」

「…………ふはは、思つてないわ」

イヴは表情を和らげ、肩をすくめながら答えた。

「あーあ、またフラれちつた。正直、君ら三人の評価は、カザミドリの中でも最近上がつてきてるんだ。段々注目されてきてる。……ただ、ルーさんは事情が事情だけに誘えないし、ロット君の方も彼の生きる 目的 を聞いた限りじゃ オレ達に加わってくれないことは明白だからね。誘うならダルク君、君だと思ってたんだけど。…………あーあ、失敗か」

「……用件はそれだけか？ なら、俺はこれで」

「いや、もう一つあるんだ」

立ち上がりうとした俺を、イヴが制してくる。

俺はもう一度イスに腰を降ろしながら、

「何だ？」

「いやや、これは君からのリアクションが欲しいわけじゃなくて、オレから君 というより、君のチームのメンバー三人 への一方的な発言だから、ただ聞いてくれればいいだけなんだ。だから何も考えず耳を向けてくれればいいんだけどさ。…… じほんつ。行くよ？ ええと、ダルク君、およびロット君とルーさん。君らがオレ達に加われないことは理解した。ということで、前回は見逃してあげたけど、今度会つときは、オレ達カザミドリは

君らの「こと、本氣で殺して行くからね？」

あくまであくまで穏やかに一コヤカに しかしそれとはまったく相反した意味の文言を イヴは口にした。

俺は反応できない。

「……ふはは。じゃあ、そういうことだから、それまでお元気で。間違つても、オレ以外の相手に不覚をとらないでよ？ オレも楽しみにしてるんだから。君らとの口・口・シ・ア・イ。ふはは、では、失礼」

どこまでも楽しそうな声でそんなことを言いつつ、イヴはテープルの上にドル札をひらりと置きながら、イスから立ち上がつてすたすたと出口へと向かつていった。

眼前では、ウェリイが俺のことを といつより、実際はロットのことを心配しているのだ。不安げな表情で見つめてくる。俺はその顔から視線を外すように下を向き、まるで頭を悩ませているように、あるいは後悔するように、手の平で顔を包んだが、ウェリイの死角となつた手の影の下、自分でも不気味なほど

自然に

不自然な笑みが、俺の顔に浮かんだ。

第一話

「ふーむ……。つまり我々は、秘密結社カザミドリの十二番隊隊長たるイヴ・アリーから、名指しで直々に宣戦布告された
送られた、ということか……」

ギルドの一角の長机に陣取り、全体重が背もたれにかかりてるんじゃないかと思うほどイスにふんぞり返りながら、赤短髪少年ロットは、俺の説明に対して、相変わらずの偉そうな口調のままでそう答えた。

その隣、俺の話を耳を真ん丸く見開いて聞いていた青長髪少女ルーは、

「えへ、そんな、殺されるなんて怖いよ～……。『今度会つたら』って、もしも今日会つたら、今日殺されちゃうってこと？ そんなのやだよー。今日の晩御飯、カレーなのに」

……人生を後悔する項目にカレーを加えるな。

いつものことだが、どんな深刻な問題もこいつらに話すとそれほど致命的でもないような気になつてくるから不思議だ。ただ単に感覚がずれてるだけなんだが。こいつらに相談しても何も解決しないことは百万年前から分かりきつてたことだが、一応こいつらも当事者なので知らせないわけにもいかず、昨日イヴから受け取ったことがづけを知らせてやつたのだ。

まあ、結果は予想通り。元々期待などしてなかつたんだから、ある意味期待通りだと言えなくもない。逆方向に期待を裏切られるよりはマシだろうか。

俺はその辺りの感想文を胸中の原稿用紙に書き記しつつ、

「……で、問題はこれからどうするか、だ。イヴ というより、カザミドリにどうやって対処していく？ まず夜の外出なんかを控えることと、一人での行動をなるべく避けることは最低限必要だが……。他に何か提案はあるか？」

「そんな付け焼刃的な対処をしても、焼け石に水だろ?」

ロットは、「これだから凡人は……」と言わんばかりに肩をすくめ、「そんなちやつちい対策なぞ、講じる必要はない。『夜に外出するな』などと言って、もし夕飯時に醤油を切らしてしまったらいだるつもりだ? お隣に醤油、ビンを借りにいくこともままならないだろ? 生姜だけで豆腐を食べというのか? そんな来るか来ないかわからない殺し屋のせいで折角の食卓が崩壊してしまっては、元も子もないだろうに。ようは、我々が殺されなければいいだけの話だ。何をしようとも、何が起ころうとも、結果的に命が無事ならそれでいい」

「……いや、だから、命を保つためにどうするかつてことだろ?」

「……つてか、醤油ぐらいストックを買つとけ」

「醤油というのは、一人暮らしではそういう使いきれるものではないのだ。一人暮らしを始めたばかりのお前も、あと半年くらい経てば身に染みて分かるだろう……」

訳の分からんことを、一いちらをイラライラさせるほどに達観したような口調で言ってくるロット。

「醤油を一人で一升使い切ることに比べたら、暗殺者の刃を交わすことなど造作もないことだ。命を保つためには命を保てばいいとう、それだけのことなんだからな。醤油を多量に消費する料理をわざわざ考案する必要もない」

「……お前の台所事情において、どれだけ醤油がネックなんだよ。結果がそうなつていればいい。そういう結果が残せればいい。それだけのことだ。私はそれ以外のものは何一つ求めんのだ。所詮この世において、後に残るのは結果だけだ。結果しか残らないのだ。結果を残すからこそ、偉人は偉人足りえるのだ。歴史に名を残すことができるのだ。結果を出すことのみを念頭に置いて行動すれば、おのずと結果は得られるものだ」

「いや、だから」

「……いい加減、こめかみが痛くなってきた。」

俺は額を手で押さえつつ、諦めたようなため息をつきながら、

「 はあ。もういい。お前に相談した俺がバカだった。どうするかは個人に任せる。勝手にしろ。俺も俺で勝手にやるぞ」

「まあ、そう悲観するな。バカもバカで、誰かに使役されることによつて物事の重要な場所に位置することもできるものだぞ」

「 ……誰がバカだつて？」

「お前が自分で言つたのだらう?」

「 ……俺は皮肉のつもりで言つたんだよ。つまりだな、俺は自分のことをバカ呼ばわりしているが、実は本心では自分のことを至極まつとうな思考回路を持つている人間だと理解していく、さらにはそのまともな人間の予想を下回るクオリティの返答しかできないお前のことを見下していく、ようするにお前のことをこの上ないバカだと　ええい、いちいち説明するのも面倒くさい！」

「まあ、お前の非生産的な話は置いておくとして、ようは、カザミドリ自身が消えてなくなつてしまえばすべて解決するのだらう？
そうすれば、我々の命を狙う人間がいなくなるんだからな」
「 ……そう簡単に言つた。そんな容易に消えてくれるような集団なら、俺達だってそこまで警戒してないだろ」

「ふふつ、そうでもないぞ？」

ロットは含み笑いしつつ、周囲にわらわらといる賞金稼ぎの同業者を見回しながら、

「そもそも、今日我々　そして、このアステルのギルドに登録しているすべての賞金稼ぎ　が、朝の九時からギルドに呼び出されたのも、つまりはそういう」

と、ロットの言葉が終わる前に、

カラソッカラソッ

ギルドのドアが開かれた。

その音に反応して、周囲の雑談がぴたりと止む。

その一瞬でできた静寂の中、入口からギルドの奥へとすたすた歩を進めてきたのは、黒髪に黒いコート、黒ぶち眼鏡に黒いハイヒー

ルと、肌以外がすべて黒で埋め尽くされた、二十台と思しき女性。

ギルド本部に属する、いわゆる公務員

リンクさんだった。

リンクさんは奥の壁際までたどり着くと、くるりと俺達の方へ振り返り、そして背筋をピンと伸ばした姿勢で高らかに、

「お早うございます、アステルギルドに所属する皆さ。ギルド本部のリンクです。本日はお集まりいただき、ありがとうございます。これから『カザミドリ殲滅作戦』について説明させていただきますが、話は長くなると思いますので、各自できるだけ楽な姿勢をとつていただいて、加えてメモの準備をよろしくお願ひします」

この発言と同時に、周囲からがぞんぞんとカバンから筆記用具と紙を取り出す音が聞こえだした。しかし、俺の正面のロットとルーはまったく動く気配がない。……メモは俺がとらねばなんのか。

俺はしぶしぶ、足元に置き放していったバッグからボールペンとペラ紙を取り出した。

リンクさんは、建物内の全員がカバンをかき回す作業を終えたのを見て取ると、

「……では皆さん、準備ができたようですので、説明を開始させていただきます。まず現状ですが、この世界には昨今、『カザミドリ』と称される犯罪組織がはびこっています。この集団の目的は、性能や可能性がまったく未知数であるアイテム『銀石』の入手。そのためならば手段を選ばず、彼らは窃盗から殺人まで、考えうる限りの犯罪を犯しています。総員は推測でしかありませんが一年前の時点では百数十人はいたのではないかと言われています。そして彼らは十三個の部隊に別れ、その集団ごとに活動しています

いえ、活動していたと過去形で言う方が正しいでしょう。先月の作戦において、三番隊は我々アステルギルドが壊滅しました。それに加え、他所のギルドにより四番隊、六番隊、九番隊そして一昨日、本ギルドに登録するアンディ氏とポーラ氏の共闘により、十一番隊を壊滅状態に追い込みました

「おお……」

と、周囲から驚きと畏敬のこもつた唸り声が聞こえてくる。

俺も少々驚いた。……いや、アンディさんとボーラさんの実力を知ってるなら、一人で一個隊を潰したことは何ら不思議ではない。俺は単に、一昨日にそんな事柄があつたということに驚いただけである。

「よつて、現時点では一番隊、三番隊、五番隊、七番隊、八番隊、十番隊、十一番隊、そしてカザミドリの核である一番隊の、計八つのグループが残っていることになります。構成員の人数も、当初の半分程度には減っていると考えられます」

淀みなくつらつらと説明を続けていくリンクさん。こんなに一気にしゃべって、息が切れないんだろうか？……いや、俺なんかがリンクさんを見かけるのは総じてこんな風に向かつて説明しているところであり、慣れてるんだろう。

そんな俺の疑問など知る由もなく、リンクさんは眼鏡のブリッジを押さえつつ言葉を続けて、

「なぜこのように、最近我々のカザミドリに対する警戒・攻撃が強まっているのかと言うと、実はとある情報筋から、恐るべき情報が届いたからです。それは

カザミドリは、『銀石』の開発をすでに七割がた達成している
そしてその『銀石』を用いれば、複数の国を相手取つて戦争
ができるほどの戦力を得ることになる

というものです。これを重く見た各国が、軍備の増強と共に、ギルドへの支援要請を始めました。つまり国からギルドに、カザミドリ壊滅に関する依頼が多数届いているということです。賞金首の賞金額が跳ね上がったり、あるいはカザミドリに関する情報収集の仕事がいくつも届けられていたり。……別に我々ギルド本部は、あなた方に平和のため、犯罪組織殲滅のために戦ってくれと言えるような立場にはありませんし、言うつもりもありません。しかしどう

スとして、あなた方に多数の高給な仕事を推奨していくと考えています」

「でリンクさんは一拍置き、核心に入るよつた声で、

「ではこれより、その仕事の詳細について説明をせていただきます」

先日のワシントンさんによる『カザミドリ殲滅作戦』の説明の後、俺達に任されたのは『調査員の搜索』なる仕事だつた。

カザミドリに関する情報収集をしていた国の調査員が、一人、現在行方不明になっているらしい。この一週間、毎日行われていた定期連絡が途絶えているのだそうだ。これはカザミドリから何らかの攻撃を受けたのではないかと睨んだ国が、その調査員の行方の搜索をギルドに依頼してきたのである。

調査員の調査という、ある種冗談のような仕事。
しかしあ、ギルドにおいてはよくあることだ。

ちなみに、その場所というのはコロノ山の奥地である。

ついこの間来たばかりの山ではあるが、今回の現場はそのさらに奥。あの時ロットが持つてた地図には載つてないような（もちろんあれはハイキング用の地図で、この山全体を網羅してるわけもない）一般人にはおおよそ用も縁もないようなエリアなのである。

この敷地の周囲は、柵で完全に囲われている。

電気が通つた、高さ三メートルとかなり高めの柵である。

なぜこんな、人間には進入が未來永劫不可能なほど厳重な囲いがあるのかというと、実はこの場所は『石』の発掘現場なのだ。この辺りの地面には主に『赤石』が埋まつており、それを発掘・集積して、各地に輸送しているのである。

『赤石』は、流通量で言えば『石』の中で一番多いもの。

全流通品の中でも、上から五、六番目にに入るくらい殊更なものなのである。

この場所を不届き者に荒らされてしまつては、商業や産業に大ダメージが起こる可能性も十分ある。だからこそ国もこの場所を柵で囲い、さらには警備員まで配置して、厳重に警戒しているのである。

いわば、城下町の次に監視の厳しい場所。

しかし数週間前に、この発掘所に関して妙なタレコミがあったのだ。その内容は「ここで採れた『赤石』をカザミドリに横流している輩がいる」とつもの。

真実ならば即刻取り締まるべきことだが、あくまでこれは匿名のタレコミ。

確信の持てる情報ではなかつたので、軍が大々的に動くわけにもいかない。大人数を裂くことはできない。そんなわけで国は、秘密裏に捜査するために調査員をここに送り込んだのだが

その調査員の行方が分からなくなつた。

最後の定時連絡は、この『赤石』発掘所の中からあつたらしい。

そこで俺達ギルドの賞金稼ぎが、その調査員の行方　あるいは、最低限その調査員が失踪した理由　を調べ上げることになつたのである。

この調査に赴くメンバーには　これは比較的緩い仕事であり、ほとんど実績がない人間が選ばれるわけで　アステルギルドのティーンネイジャー組たる俺とロットトル、ギーンとウェリィ（ただしワイトは義手を作つてゐる最中で、メンバーから外れています）、そしてもう一人　情報屋のムツナが選ばれた。

実働人員は計六人。各々見知りあつた人間である。俺達がムツナと組むのは初めてだが、まあ、特にサプライズもない。

なお、このチームの取りまとめたる責任者はアンディさんは任された。

アンディさんはアステルギルドにおける貴重な戦力で、カザミドリ関連の要請が氾濫している現在、彼が関わるべき重要な仕事は他にも多々あるし、こんな中途半端な仕事に帯同させるならもっと別

な人でもいいのではと思ったのだが

本人に聞いてみたところ、今回のこれは、アンディさんにとっては休日代わりみたいなものなんだそうだ。出発間際には、

「くはは、またお前らのトリオ漫才を見れるたあ、楽しみだ」
なんていう、マコト失礼なことを言つてきた。傍観者は呑気なものだ。俺の気苦労も知らないで。

まあとにかく、そんな人員構成で、

実際に一時間山道を歩いた挙句、囲いの中の唯一の出入り口（もちろん警備員が待機している）を通してもらい、俺達は発掘所のエリアの中に入つていったのである。

柵の中に入つてまず俺達が向かつたのは、この敷地のほぼ中心にあるロッジ。

ここを拠点として、これからの一日間、俺達は活動する予定である。

こつちは鉱員の方々の休憩所として使われている建物らしいのだが、俺達の遠征に際して、搜索に支障がないようにと彼ら全員に休日が与えられたのだそうだ。よつて、十人以上が余裕で生活できそうなこの木造建造物を、俺達七人が完全に自由に使えることになったのである。

そんなどだつ広いロッジにたどり着き、アンディさん主導の下でこれからの方針や時間配分などを決め、連絡用のトランシーバーを渡された後に、時間を無駄にするのもなんだしどう感じで、

荷物を置いただけで、「ゆつくりしたい」とロッジの床にへばりつくルーを無理矢理ひつべがして、俺達はさっそく搜索を開始した。

搜索のチーム分けはというと、アンディさんはロッジで待機、他

の六人で一人一組の三チームに分かることになった。

分け方は、ロットとルー、ウェリイとギーン、そして俺とムツナというペア。ウェリイがロットと組みたがったこと以外、特に争うこともなく決まった。まあ予想通りというか、予定通りというか、とかく順当な組み合わせだらう。

俺としては、ムツナという割と常識的な人間と初めて組むことになり（アステルギルドの年少組の中でギーンに目をつけている辺りも、実に常識的な価値観を持つてると言える）、本件に関しては、ここ数年まれに見るほどに安心していたが、同時になぜだか物足りなさも感じてしまう。その原因は、俺には皆目見当がつかないが。

ともかくにも、俺はそんな不条理な気分を抱えつつも、ムツナと共に捜査をすることになったのである。

他の五人と別れ、俺達のペアが任された南東セクションへ向かう途中。

俺の脇で心底わくわくしたような笑みを浮かべ、青紫のセミローン

グな髪を風に揺らしている、黒ローブ姿のムツナは、

「いやー、私これが初仕事なのよ。ドキドキするな~」

と、初仕事に赴く最中とは思えないほど不安を微塵も感じさせない声音で言つてきた。

俺は愛想笑いの延長線上的笑顔を返しながら、

「そうなんだ。……というか、あんたもギルドに登録してたんだ?」

「うん、一応登録だけしといたの。ギーン君がどうしても首を縊に振ってくれないから、仕事はまだするつもりなかつたんだけどね。

……ただ、マスターに人手が足りないからどうしてもつてお願ひされて、まあギーン君と一緒にないかつて思つて、今回は特別に受けたんだよ」

「へえ、そうなんだ」

俺は感心したようなイントネーションで答えたつ、「……でも、これが初めてってことは、仕事の勝手が分からないだろ？ あんたは元々戦闘要員でもないわけだし、しかも今回のこれは力ザミドリ関連なんだからな。……まあ、何かあったときは迅速に助けを求められるよう、心の準備は常にしといった方がいいだろ？」

「あはは、心配してくれてありがと。……でもでも、私だってそんな足手まといにはなんないよ。情報屋を侮つてもらっちゃあ困ります」

ムツナは相変わらずの楽しそうな微笑のまま、人差し指で天空を指差した。

「情報っていうのは、すべてにおいて何よりも重要なものだからね。たとえば敵の戦力や戦略の情報を手に入れて、逆にこっちの情報の流出を防げば、最低限の力で最大限の結果を得ることができるんだから。何て言つたつて『てくのろじー』の時代には、情報の早さで商売の勝ち負けがついてたつて話しだし、国対国の競り合いも情報合戦だつたつていうんだから。情報っていうのは、この世で一番重要なファクター。そしてその扱いに長けてる人間つてのは、どこでも重宝するものなんだよ。だからマスターも、わざわざ私をこのメンバーに加えたんだから」

青紫の髪を風になびかせつつ、鼓舞するように言つてくるムツナ。

俺は感心九割、疑心一割程度の心境を抱えて、

「……へえ、そうなんだ」

「そうよ、そうなのよ。情報を独占すれば、世界征服だつて夢じゃないんだからね」

本気か冗談か分からぬことを、ニタリ笑いで言つてくるムツナ。やたらめつたら得意げな表情をしてくる。ここは笑えればいいのか感心すればいいのか俺が迷つたのは、ここだけの話だがね。……まあ、そんな世間話でもつて初対面に近いムツナとそこはかとなく親交を暖めながら、草を搔き分けつつ、獣道を行つたり来た

つひとつ、俺達は搜索を進めたわけだが、

捜査を始めて一時間後、

急に雨が降り出した。

山の天気は変わりやすいといつそれなのか、それともただの夕立なのかなあずかり知らないが。

最初はぼつぼつという小雨だったが、数分もしないうちに大降りになってきた。

かなりの雨量。粒が大きく、頭に当たると少々痛いほどである。強い風も吹いてきて歩きづらべ、しかも視界まで相当悪くなってきた。

これじゃあ口クな捜査もできないし、しかも地すべりやら向やらで山歩きは危険だろうと思つていると、まるで俺の思考を見透かしたかのように、握っていたトランシーバーから、

『これからアンディ。ちょっと雨が強くなってきたな。危ねえし、とりあえず捜査は一時中断して、みんなロッジに集まってくれ。そこでもう一度計画を立て直す。以上だ』

と、向こうのトランシーバーにも雨音が入つてゐるせいだろう ザーザーとうノイズ交じりで、そんな命令が届いた。

俺はムツナの方を振り返り、肩を持ち上げながら、

「……だつてさ」

「そうね。……風邪引いちやうし、早く戻る」

そう言つて、ムツナはロッジの方へとこじ歩き出す。

俺もその後を追いながら、ふと、黒い空を見上げた。

どこまでも続く、暗澹とした雲。

雨は、まるで弱まる気配はない。

この雲行きは、ビームでもビームでも怪しかった。

周囲の木々を切り倒して造ったような、純木製の平屋。

一般的な家の三、四倍くらいの広さで、くつろぎスペース、キッチン、浴室、個室が十部屋と、宿屋経営ができるほどに設備が整っている。事実、通常時は数人の鉱員達がここで寝泊りしており、食材やら日用品など、生活に必要なものはすでに揃っているのである。

雨足がいよいよ強くなり、風も吹き荒れてきた外から、俺とムツナは追い込まれるようにこのロッジの中に駆け込んだ。

玄関口、ずぶ濡れの靴を脱ぎながら中へ入ろうとした俺達に、「はい、これ使って」

と、ルーがタオルを差し出しててくれた。

「ああ、ありがとう、ルーちゃん。助かる」

とそれを受け取って顔を拭い始めたムツナの横、俺も「サンキュー」と言いつつ同じようにタオルを手にとって、シャワーを浴びた後のような髪をごしごし拭き始める。

ようやく毛先から滴る霖が止まつたところで、俺はルーに、

「もう、みんな来てるのか？」

「うん、大体来てるよ」

……大体？

その一言に引っかかりながら建物の中を見回すと、アンディさんとウーリィ、ギーンが、すでに奥のテーブルでティーカップ片手にくつろいでいた。他の二ペアの担当場所は俺達のところよりも断然ロッジに近く、十分くらい前にはすでに着いてたんだろう。もしくは、雨が降り始めた時点であつたと引き返してしまったが、だが

現在、ここにいるのは六人。今日の遠征メンバーは全部で七人いたはず。一人足りない。アンディさん、ウェリィ、ギーン、ルー、

ムツナ、俺とあと一人、ええと そうだ！

「 おい、ルー。ロットはどうした？」

「ん？ ああ、それがねえ 」

ルーは手の平を上に向け、「 困ったもんだよ」とつまづな顔をして、

「 アンティさんから連絡があつた後、『私はもう少し調べたいことがある』とか言ってね、どつか行っちゃつたの。多分、まだ搜索を続けてるんだと思う。あたしは『危ないから戻ろ』って言ったのにさあ」

……調べたいこと？

「 あいつが雨天決行で仕事を継続するなんて、何があつたのか？」

「 さあ？ わかんない。……あ、でも、さつき捜査してるときにねえ、ロットつてば、たまにあたし達の後ろの方を気にしてたよ？ まあ、気にしてただけなんだけど。でも、何回か後ろ振り返つてたよ。あたしが振り返つても何も見当たんなかつたのに。……気になることって、それかなあ？」

ロットが背後を気にしていた？ そして『もう少し調べたいことがある』？ ……まさか、監視か？ あいつが誰かにマークされたとか？

……いや、それはない。ありえないだろ。

この発掘現場への出入りはちゃんと警備員に管理されてるし、あの柵を越えるなんて不可能だ。なんせ『赤石』やら『青石』なんかで攻撃しても触れた瞬間にそれが灰になるほどの強力な電流を流してるし、『黄石』では無効果。しかも四重構造になってて、『黒石』を使ってですら五体満足なままじや破れないようになつてる。国の研究所が直々に開発した、完全なる遮断設備。このエリアに不審者が入り込める隙間などあるはずもないんだ。

だから、ロットが不審人物に追跡されてるなんてことは、ありっこない が、つい先日イヴに宣戦布告を食らつたばかりだつてのもあって、どうにも一抹の不安は拭いきれない。

俺は、奥のイスの上でリラックスしているアンディさんに向かって、

「……アンディさん。ロットのことですが 」

「ああ、分かつてる」

アンディさんはなだめるような表情を向けてきた。

「……しかし、あのロットのことだ。そう簡単にやられるようなタマジヤねえ。それにこの天気じゃあ、逆に探しに行つた方が危険だ。ミイラ取りがミイラになりかねねえしな。とにかく、この雨が弱くなるまではここで待機していよう。あいつを探しにいくのは、その後でも遅くないだろ?」「うん」

「……分かりました」

俺はそう答えるながら、再びタオルで頭を拭き始めた。

俺の横につつ立つてたルーは、

「まあ、あのロットだもん。心配することはないよ」

「ふん、その青ガツパと同じ意見というのは気分が悪いですが、しかしその通りです。あなた」ときが心配するまでもありません」

奥のテーブルからウェリイが話に入ってくる。

その「青ガツパ」という単語に反応してルーがウェリイの方を睨みつけ、部屋の中には『赤石』も『黄石』もないのに火花が飛び始めた。……やれやれ、またここにいつらのくだらない喧嘩が始まると俺が憂慮したその時

ジジッ、ジジジジジジ

いきなり、この部屋に三つあるトランシーバーそれぞれから、耳に刺さるような雜音が聞こえてきた。

アンディさんは、その中の一つである自身の胸ポケットに納まっていたものをひょいと摘み上げると、

「はい、もしもし?」

『ここ、じゅら、口口ノ山発掘所、にゅ、入所管理局』

「おへ、じゅらアンティ。……どうした？」

『あ、アンティさん！ もちろん緊急事態です！ し、し、侵入者がありました！』

「侵入者あ？ ここにか？」

『は、はい！ 警備員の一人を刺殺し、そ、そのまま鉱山内へと入つてきました！』

「何人？」

『し、侵入者は一名！ くく、暗闇でよく確認できませんでしたが、十台半ばといった体躯の人間でした！』

「いつだ？」

『さ、三十分前です！』

「三十分前え？」

アンティさんは声を荒げ、

「何ですぐ連絡をよこさねえ！」

『すす、すいません！ き、救護活動を、しております……』

「そうか、そりやそうか……わかった。じつちはじつちで対策を打つから、そつちも警戒してくれ」

『は、はい』

その返事を聞くと、アンティさんは再度トランシーバーをポケットにしまった。

侵入者。

その不測の事態に、ここにいる六人の表情が一瞬固まる。ピリッと、一気に張り詰める空気。みながみな考え込むよつな顔をして、誰一人その姿勢のまま動かなくなる。

恐らく俺を含めた六人とも、ロットの安否を心配してるんだろう。この侵入者とロットが言った「調べたいこと」は、簡単にリンクする。

では、この侵入者は一体何の目的でここに侵入したのか？ なぜ

警備員を殺してまで侵入してきたのか？ そしてなぜロットをつけ回していたのか？

正直、現在ある情報だけでは、その疑問への解答を出すのは至難だ。予測の域を出ない。だからこそ、それぞれ黙々と考え込んでるんだ。答えを探してるんだ。

そして誰も答えを発せないまま一分以上も無音が続き、いよいよ部屋の中に不安げな雰囲気が漂い始めたところで、

ジジッ、ジジジジジジッ

またも、三つのトランシーバーが鳴った。

今度は何の連絡かと、再びトランシーバーを耳元に持っていくと、『あー、あー、じゅりゅりロットだ、ビツギー』

兩音交じりの、ロットの声だった。

六人の顔が強張り、受信機に視線が集まる。しかしそんなこちらの緊張を察することもなく、電波の向こうのロットは、いつも通りの底抜けた声で、『アステルギルドの諸君。六人とも無事か？ ビツギー』

「ああ、無事だ」

トランシーバーを口元へ持つていい、俺が答えた。

「……といつか、お前は今何してるんだ？ 早くこっちに戻ってこい」

『いや、それは無理だ。どうぞ』

「……無理？ お前今、何してるんだ？」

『ああ、実はな、これから私は

決闘をするところだ。どうぞ』

「け、決闘つ？」

俺は聞き返して、

「……つて、一体誰とだ？」

『ああ、それがな』

と、向こうの無線機から、環境音に混じつてロットではない声が聞こえてきて、

『ふはは。仲間に連絡か？ だつたら遺言もちゃんと残しておいたほうがいいぜ。なんせ、それがお前の最後の会話になるんだからな耳障りの悪い、卑しくいやらしい、どこまでも陽気なイントネーション。嫌になるほど聞き慣れたこの声は イヴ！』

「おい！ その声、あいつなのか？ 決闘つて、そいつと殺りあうつてことか？」

『ああ、まあ、そういうことだ。というわけで、私がそちらに帰るのはもう少し遅れる。だからちょっと待っていてくれ。ビリヤ』

「つてか、大丈夫なのか？ お前、勝てるのか？」

『ははは。愚問だな。前も言った通り、私は結果以外は何も求めない。そして現在の私は、こいつに勝利するという結果のみを求めている。だから、私が生き残る以外の結果は生まれるわけもないのだ。だから安心しろ』

「つて、だから、そんな理の適わない理論じゃなくて、そいつと戦つて実質的に勝算があるのかつて 」

『ではでは、皆の衆。朗報を寝て待っているがよろしい、どうぞ』

ジジッ

それだけ言って、トランシーバーの音が途切れた。

なぜイヴがここにいる？

なぜイヴがロットといる？

なぜロットに勝負を吹つかけた？

状況整理に頭が追いつかず、混乱が頂点に達する。ルーとウェリィが、心もとなげな顔で、俺が握っているトランシーバーをじっと見つめてくる が、俺はそれに向ける言葉が

見つからない。

これからどうすればいいのか、どうこう行動に出るべきなのか、俺が判断を仰ぐようにアンディの方を見上げると、

「……ちっ、ショガねえよ」

アンディさんは、なおも大降りの窓の外を眺めながら、

「この雨じゃあ外に出ても危険だし、今から行つてもあいつらの戦闘に間に合つわけもないだろ?」…………今はただ、あの野郎を信じて待つしかねえな

「どうやら」の悪天候は通り雨の類だつたらしく、十五分後にはだいぶ弱まってきた。風もほとんど止んで、視界もそこまで悪くない。次第に暴風雨から通常の雨降りへと変遷していった。

しかし、ロットからの連絡はまだない。

……これは、戦いが長引いてるのか、それとも、もしかしてロッジ内にそんな不安が渦巻く中、いよいよルーとウェリイがいても立つてもいられないようソワソワし始めたところで、アンディさんが窓を開けて外を確認。「ここでようやく、

「……よし。ロットを探しにいくわ」

と許可が下りた。

それを聞くや否や、焦燥した表情で一目散に外へ飛び出すルーとウェリイ。アンディさんの

「おい！ カザミドリが潜んでるかもしけねえんだから、慎重に行けよ！」

という注意も、果たして一人に届いたのか疑問なほどに、つむじ風のように駆け出して行ってしまった。

「……つたく」

その背中を見送りつつアンディさんは嘆息して、俺達の方を振り返りながら、

「とにかく、俺達も行くぞ。お前達も十分注意しろよ……あと、あいつがここに帰ってくるかも知れねえから、とりあえずムツナはここで待機してろ」

「了解です！」

敬礼まがいの仕草をしながら答えるムツナ。
ムツナにロッジを任せ、アンディさんに続いて俺とギーンもロッ

ジを出た。

そしてドアの前に立つたアンディさんの
「じゃあ、俺らも手分けしてロツトを探すが、もし見つけたらアトラ
ンシーバーで連絡すること。いいな?」

という指示に、俺とギーンは「はい」とハモリながら答えて、
三方に散った。

そして、雑草を蹴散らして山狩りをしている最中、トランシ
ーバーにアンディさんから連絡が入ったのは、ロツジを出でから三
十分後のことだった。

『……全員集まれ。場所は、北東エリアの北端の崖のところだ』
という指示に従つてその場所に行くと、すでに俺以外の全員
アンディさん、ルー、ウェリイ、ギーン、ムツナ　が集まつてい
た。何やら落ち着かない様子で、みんな一方向へ視線を向けている。
俺がそちらへと駆け寄ると、俺に気付いたルーが手を振りながら、
「あっ！　ダルク！　こっちだよ！」

「ロツトはいたのか？」

「うん。多分……いた。だけど

歯切れの悪い返事をするルー。

「あれだと思うんだけど、その、遠くて確認できなくて……」

そう言いながら、ルーはちらりと視線を横に泳がせた。

ルーの視線を追つていった先には谷がある。九十度に限りなく近
い絶壁。とても人が簡単に上り下りできるような角度ではなかつた。
斜面ではなく、万人をして崖と言わしめるものである。

その谷底は、かなり深い。

下の地面に生えている木々もかるうじて見えるが、それはもはや
砂粒よりも小さい程度。高低差は三、四百メートルくらいだろうか。
覗き込むだけで目眩がしてきそうな深さである。

そして前方百メートル程先、ぽつかりと穴が空いたような谷の中

に、台地がある。

この谷を海に例えるなら、浮島のよつなものだ。

その台地はちょうどこちらと同じくらいの高さである。もし陸続きだつたら段差もなく渡れるだらうといつぱり、ひょうど真正面にその陸地はある。しかし、こちらと向こいつ側にはかなりの幅があり、とても直接跳んで行けるような場所ではなかつた。

そしてその台地の上、地面に何かが横たわっている。遠過ぎて、『地面の上に何かが積まれている』ということがかろうじて分かる程度のものだが

「……あれ、遠くてよく見えないけど、多分、人……だよね？　もしかしたらあれがロットじゃないかって……」

よぎる不安に声を震わせながら、ルーが俺に説明してくれる。

「ロット様～っ！」

さつきから一生懸命台地の方へ田を凝らしていたウェリイが、手で筒を作つて、その横たわつたものに向かつて叫んだ。

しかし、それはまったく反応しない。ピクリとも動かない。動く気配がない。かすかな山彦が返つてくるだけだった。

再度、ウェリイは

「ロット様～ま～っ！」

と叫んでみたが、やはり同じだ。リアクションがない。

俺の隣に立つていたギーンがアンディさんに、

「……いい、渡れないんですか？」

「ああ、一応ここにはつり橋が架かつてたんだが

答えるながら、アンディさんはすたすたと崖の淵の方に歩いていった。

そこには、地面に突き刺さつた木の杭と、それに巻きついているロープがあつた。その巻きつき方は頑丈そうだが、その片端は途中で切れている。力任せに引き裂かれたように、ブチブチにちぎれていた。

ギーンはそれを見つめながら、

「……それは？」

「つり橋の成れの果てだ。ロープが引きちぎられてる。恐らく、さつきの風雨で飛ばされたんだろう」

「じゃ、じゃあ、どうやってあれを確認するんですか？ 向こう岸に渡らなきゃ、ロットさんはどうか確認が

「……まあ、強行策でいくしかないだろうな」

そう答えるながら、アンディさんはおもむろに肩に掛けていたバッグからするとロープを取り出した。

結構太めの頑丈なヒモ。一体それで何をするつもりなのかと眺めていると、アンディさんはそのロープの片方を結んで輪つかを作り、次いでその逆の端を握ると、カウボーイよろしく頭上でぶんぶん振り回し始めた。

何となくこのあと展開が予想できてきた俺の目の前、アンディさんがそのロープをぴゅっと前方へ放り投げると、その輪つかは谷を飛び越え、向こう岸の地面に埋まつた杭にホールインワン。谷に一本の線がかかつた。

杭がしつかり固定されているのを確かめるようぐいぐいとヒモを引っ張っていたアンディさんは、ふいに俺とギーンの方を振り返つてきて、

「……どうする？ 結構丈夫なロープだから、数人分の体重にも耐えられると思うが……お前らも来るか？」

「あ、あたし行く！」

「わ、わたくしもいきますわ！」

ルーとウェリィが身を乗り出して手を上げてきた。

なんつ一度胸だ、これも愛の力だろうか、と俺はただただ感心していたのだが、アンディさんは首を横に振つて、

「……いや。お前らの細腕じゃ、登るのは無理だろ。落つこちたらジ・エンドなんだからな。確認作業は、とりあえず男に任せとけつてことで、どうする？ ダルク、ギーン」「

再度俺達のほうへ顔を向けてくるアンティイさん。

ロッドが心配なら、ルーやウーリイのよつに率先して行くのが当然のような気もあるが、しかし、正直なところ、この高さはさすがに怖いし……。

と、風渦巻く谷底を覗き込みながら俺が返答を迷つていると、「あ、はい。行きます」

俺の脇、ギーンが躊躇なく答えた。……答えてしまつた。その返答にこぐりと頷き、三度俺の方を見てくるアンティイさん。年下にこんな先手を打たれては、年長者として、人生の先輩として、拒むことなどできるはずもなく

「じゃ、じゃあ、俺も」と、俺も答えた。……答えてしまつた。

アンティイさんは一つ頷くと、俺とギーンにもロープを握らせ、「絶対離すなよ？」

といつ一言と共に、心の準備をする猶予も神頼みをする時間も遺言を残す暇もくれないままに、あっけなく地面を蹴つてしまつた。アーアアアー、なんて叫ぶ余裕もなく、俺とギーンとアンティイさんは、谷底からおよそ数百メートル上空を振り子のように斜め下に飛んでいき、垂直な地面にスタンと着地した。

一応谷を渡ることができたことに安堵したのも束の間、

「はれ、早く登るぞ」

と言つて、アンティイさんはすいすいとロープを引いて上へ登つていつてしまつた。

それに続いて、ギーンも軽快そうに登り始めていた。

俺は、眼下に広がるまるで地獄のよつな地底に身震いしながら、

「これ……上の杭は抜けたりしないんですか？」

「くはは。そんな心配ねえよ。なんせ橋を支えてたんだから。それなりに丈夫なはずだろ?」

「そ、そうですよね」

俺は取り繕うよつに答えつつ、この恐怖を脱するには早く登るこ

とが先決だということによつやく気付き、ロープを伝い始めた。

登りながらチラリと下方を見ると、地面は田を凝らさなければ見えないほど遠い場所。今さらながらこの手を離した瞬間に俺の人生は終わるということに考えがいたり、いよいよもつて寒気がしてくる。俺はどうにかこうにか思考を別方向に向けようと、田の前をずんずん登つていいくギーンの背中に向かって、

「……な、なあ。ここって一体どういう場所なんだ？　どうにも、特別な地形みたいだけど……」

「いや、まあ、見ての通りの崖なんですが　」

ギーンは少しだけ首を回して、

「　何でも、千年以上前に起こった地震でこうなったらしいです。その頃は地元民族の儀式の祭壇として使われたり、あるいはその名残で罪人の断罪に使われたりもしたそうです。……ただ、ここでの『赤石』の発掘が始まつてからは、誰も寄り付かない場所になつたんですが、ね」

含み笑いのような苦笑いのよつな顔で説明していくギーン。

この辺りの歴史について俺はまったく詳しくないが、何やらいわくつきの場所らしいことは分かる。こんな歪な地形があれば、何か宗教的意味を押し付けたくなるのも理解できないでもない。……まあ、イヴはそれを知つて決闘の場としてここを選んだのかどうかは、俺の知つたことではないが。

そんなことを考えつつ、えつちらおつちらとロープをたぐること数分。

手が痺れてきた頃合でよつやくたどり着いた、天空の離れ小島。

地面が水平であることがこんなに幸せだったとは思いながら台地の中ほどへ進むと、俺より数分先にこの地面にたどり着いていたアンディさんとギーンが、立つたまま動かなくなっていた。

「一体どうしたんです？」

と尋ねつつそちらへ近づいていき、二人の視線の先に眼を遣るとそこに横たわっていたのは、赤い水たまりの中、大剣『グレン』を右手に握り、その鞘を背中に掛け、白いフリースに黒ズボンという、ついさっきまでロットがしていた服装とまったく同じものまとめつた

首のない死体だった。

日はすでに暮れている。

というより、今現在はもはや深夜だ。あの空中小島からこのロッジに引き返ってきてからすでに六時間以上が経つており、今現在、俺以外の五人はすでに眠りについているのである。

では、俺は寝ないで何をしているのかと訊うと、見張りだ。

俺はルーとウェリイが寝ている部屋の扉の前に座り、二人に異常がないか見張っているのである。

そう 「ロットが死んだ」と聞かされた時、ルーとウェリイは尋常ではない反応を示したのだ。詳しく描写して気分のいいものではないので細部までは述べないが、ようは、ルーは泣きわめき呼吸困難を引き起こして摔倒し、ウェリイにいたっては錯乱して腕や頭や首などを自身の爪でもつて自傷を始めたのである。

それを、アンディさんが薬で無理矢理眠らせて止めた。
そうでもしないと、止まらなかつた。

そのおかげで、今の二人は落ち着いている 強引に落ち着かせている。目を覚ませばまた同じ行動をすることは目に見えるが、しょうがない。少しずつ少しずつ、受け入れてもらはうしかない。
……もはや、それしかない。

こういう状況になつて、改めて理解した。

あの一人にとって、どれだけロットが重要な人間だつたか。特別な存在だつたか。普段のくだらないじやれあい見ていく限り、腐れ縁的な仲でしかないとと思っていたのだが、そうではなかつた。それだけではなかつた。ロットは、あの一人の心の中の深い場所にいたんだ。……別にだからとつて、摔倒も自傷もしなかつた他の四人がロットを軽んじていたとも言わないが。

ただ、アンディさんは大人であり、数々の修羅場をくぐってきた賞金稼ぎであり、人死ににいちいち取り乱すような年齢でもない。

取り乱さない方が自然だろう。

ギーンは　あれだけ冷静な人間だ　内心では混乱しているだろうが、なんとか平静を保っている。

ムツナは、ロットとの付き合いは至極短い。そこまで感情移入するにいたつてないのだろう。

そして俺は　まあ、俺は　そういう道　の上にいる人種だから。今さらそこまで派手なリアクションをするような人間じゃない。普段より少しばかり口数が少なくなる程度だ。

ふと、俺は脇の壁に立てかけてある大剣を手に取った。

ロットの愛用武器『グレン』。あの現場から拾ってきたのだ。自分の腕で持ち上げてみて改めて思うが、やはり重い。細めの丸太くらいの重量はあるだろう。ロットはこんなものを年中背負い、そして振り回していたのか。

あいつがこの剣に炎を灯した光景を思い出す。

これで敵を成敗したことは、一体何回あつただろう？

俺達を守ってくれたことは、一体何回あつただろう？

逆に俺が切りかられたことは、一体何回あつただろう？

そしてそして、思い出す。

前回の仕事で、コロノ山に向かつて出発する朝に、ロットが俺に言つてきた言葉。

「もし私に何かあつたときは、これをお前に譲つてやつてもいいぞ」

……まさか本当に俺がこの剣を手にする日が来るなんて。

あれは　あの言葉は、冗談でしかないと思っていたのに。

少なくとも俺にとつては、ただの冗談でしかなかつたのに。

ロットにとつてもただの冗談だつたと思つていたのに。

何でこの世は　因果なんだ。

と、

トスン、トスン、トスン

暗闇の廊下の向こうから、スリッパの音が聞こえてきた。

手元のランプをかざし、誰が来たのかとそちらを見やると、赤く照らし出されたのは青紫のセミロングヘア。ロープのような寝巻きをまとったムツナだった。

ムツナは不安げな表情で、

「……どう？ 中の二人？」

「ずっと静かなもんさ」

俺は何ともなしに答える。

ドアの前に立ち、扉の木目を不安げな顔でしばし眺めていたムツナは、ふつと思い直したように、俺の隣に腰を降ろした。

「……でも、まさかこんなことになるなんてねえ」

「ああ……まつたくだ」

俺はうつむき加減で同意する。

「でも、その……私、少し引っかかるんだけどさ」

「……何？」

「ロット君、本当にイヴァリーに殺されたのかな？」

「……当たり前だろ。あの状況を見る限り。あの丘の上で二人は決闘し、ロットは負けた。首を切られてな。恐らく、頭は崖の下にでも落ちたんだろう。そしてイヴはあそこから立ち去り しかし風はまだ吹き荒れてたから その後に、あのつり橋が落ちたんだ」

「……本当に、そうかな？」

「そうだろ。ロットがあの丘の上にいたことから、一人の決闘が行われたのはつり橋が落ちる前、雨が降ってる最中だ。その間にこの柵の中にいたのは、俺達六人とロット、そして入り口の検問を力ずくで突破した一人の侵入者 イヴだけだ。警備員はずつと入口の待合所でチェック作業をしてたし、雨が降ってる間俺達はずつとこの小屋の中に入た。ロットを殺れる人間はただ一人。イヴってことになるだろう。『橙石』も使われてなかつたし、何よりも、あ

の首は『黒石』の刃で切られてた。そういう切り口だつた。それが何よりの証拠だろう?」

「そつか……」

ムツナはあーに手を遣りこくりと頷いた。

「……でも、何でイヴアリーは首を切つたんだろう?」

「そんなの決まってるじゃないか。急所だからだろ」というか、何であんたはそんなに疑つてかかるてるんだ? まさか俺達を疑つてるのか? それこそ、意味が分からぬだろ。俺達にどうちや、ロットは付き合いが長い仲間だつたんだ。ルーとウェリィの取り乱しょを見ればわかるだろ」

「うん、そうだね」

ムツナは寂しげな笑顔を浮かべ、

「うん……私にも分かるよ。大切な人がいなくなるつて、辛いよね」「何だよ、急に……まさか、お前も?」

「うん。少し前なんだけどね。お父さんが……死んじやつたの。あの時は本当に……辛かった」

声のトーンを落としながら、膝の中に顔を埋めるムツナ。

「……結局ね、人の世界つていうのは大切な人だけで出来てるんだよね。世界中には何千万つて人がいるけど、それってただの背景でしかなくつてさ、私達の世界つていうのは、それぞれにとつて大切な人だけで構成されるんだよ。だから、その大切な人がいなくなる、消えちゃうっていうのは、その人の世界自体が壊れちゃうことと同じなんだよ」

俺は黙つて、ムツナの言葉を聞き続ける。

「世界が壊れるつていうのは、すごく痛い。心に痛い。苦しい。自分がずっと大切にしてきたものが、自分が生きてきた証が、自分の生き方自体が、自分の存在自体が、自分の世界が、なくなっちゃうなくなつちゃつたみたいに感じる。ずっと側にあつたはずの笑顔が、優しさが、消えちゃう。今まであつたはずの幸せが、希望が、消えちゃう。そういう存在がいたから、いくら大変なことが

あつても生きてこれたのに、乗り越えて来れたのに。……それが消えちゃつたら、後には絶望と苦しみしか残らない。それは、すぐ

痛い。心に痛い」

ムツナはついと顔を上げ、俺に哀願するよつた表情を向けてきた。

「……だからわ、一人のこと、ちゃんと見守つてあげてね？」

そう言つと、ムツナはふらりと立ち上がり、

「じゃ、おやすみ」

廊下の奥、闇の中に消えていった。

離れていくスリッパの音も聞こえなくなり、俺は再び廊下に一人きりになつた。手持ち無沙汰になり、何ともなしに今のムツナのセリフを反芻していると、

ぎいっ

背中のドアが開いた。

驚いて振り返ると、そこから顔を出したのは、生氣の薄い顔をした

ルー。

「……ルー、大丈夫なのか？」

「うん、もう平氣」

あまり平氣ではなさそつた、いつもより数十段低いトーンで答えた、ルーは部屋の中から這い出してきた。そして俺の隣にちょこんと座り、

「……ごめんね、迷惑かけて」

「別に迷惑なんかじゃない。しょうがないさ」

俺はなだめるように答えた。

ルーはちらりと俺の顔を覗つて、

「……でも、ダルクは冷静だよね」

「そう、か？」

……いや、確かに、今までずつと一緒にやつてきた仲間の死に直面した人間としては、薄い反応だつたかもしれない。冷静すぎたかもしれない。だがやはり、死体を目にしたからといって、俺

は錯乱しようとも思えないのが正直なところである。

俺の両親も、叔父叔母も、従兄弟も、人を殺して生計を立てていたんだ。

いくら実地経験がほとんどないとはいえ、服を赤く染めたラキを玄関で出迎えたことは数え切れないほどある。手についた血を洗面所で洗い流しているラキを眺めていたことも数え切れないほどある。排水溝の赤い汚れを掃除したことだって数え切れないほどある。

だから俺は、今さら血の海を一つ見せられたからと言つて

と、俺はそんな思考を振り払うように首を振つて、

「いや、冷静に……見えるだけだ。みんながみんな混乱してる。

俺だつて混乱してる」

「……そつか、そうだよね。“ごめんね。当たり前だよね。人が死んで悲しくないわけないもんね。ロットが死んで、何とも思わない、は、ず」

いきなりルーの声が震え始めた。

驚いてルーの方を見ると、目の焦点が合つてない。瞳孔が開ききつている。体中が、寒がるようにガタガタと震えている。

「ロットが、死……ロットが、死ん……ロット……ロットが、死……ロット……ロット、うつと……」

「お、落ち着け！」

俺は慌ててルーの肩を抱き寄せた。

そして睡眠薬がないかと周囲を見回したところ、いきなり、ルーが俺の懷に顔を押し付けてきた。

しがみ付かれて、動けなくなる俺。

「……やだよ、やだよ……ひぐつ……やだよ……ロットがいないなんて……やだよ……ロットが……ひぐつ……ロットが……いないなんて……」

俺の胸元、ルーはぐぐもつた声でわめいている。

「もうやだ……やなのに……つぐ……何で、どうして……ロットが死ななきや……ならないの、うぐつ……もひ、やだ……やだやだ……やだよ……」

ルーは、俺の服を濡らしながら、

「……もうやだ。パパも……ロットも……大事な人がいなくなるのは……もうやだ。
は……いやだ。……あたしの周りからいなくなるのは……もうやだ。
……もう一度と……誰も……いなくなつてほしくない。……誰も失
いたく……ない。……なのに。ひぐつ……ダルクは……ダルクだ
けは……もう……あたしのそばから……いなくならないで……え
……かける言葉が見つからない」

見つからず、代わりに俺は、眼下のルーの頭をそつと撫でた。

と、ルーは瞳に涙を溜めたまま顔を上げ、

「ねえ、ダルク……

……ギルド……辞めよう?」

「…………え?」

「……だつて……あたし達がカザミドリに遭つたのも……ギルドに登録してたからでしょ? ギルドの仕事……してたからでしょ?
こんなの……危なすぎるよ。だから……止めよう? 止めて……一

緒に別な仕事して……静かに暮らそう?」

「……い、いや、だけどお前は、ギルドで経験積んで、情報を集めて、父親を探し出すのが目的だったんだろ? 目標だったんだろ?
ギルドを止めたら、それが叶わなくなるんじや」

「ダルクの方が大事だよ!」

ルーは、訴えるように叫んだ。

「もう……もうやなの。大切な人がいなくなるのはやなの。ダルクにはいなくなつてほしくないの。危ないことしてほしくないの。ずっと一緒にいたいの。ずっと側にいてほしいの。だから……ギルド辞めよう? 辞めて……一緒に別な仕事しよう?」

そう言って、すがりつくように、再び俺の腕の中に顔をうずめて

くるルー。

……ギルドを辞める、か。

いや、確かにこれが普通の反応なのかもしれない。普通の結論なのかもしない。続ける気にならないのが普通なのかもしない。

しかし

あの台地で、死体を前に、アンティイさんが俺達一人に黙つてきた言葉。

『 これ を知つた時、あいつら 特にルーとウェリイ がどういう反応するかは、大体予想がつく。多分、見てる方も苦しくなるようなことになるだろう。……ただ、お前らだけは降りないでくれ。カザミドリを討つために、お前らだけは戦い続けてくれ。頼むつ。この通りだつ』

そう言つてアンティイさんは、子供でしかない、新米でしかない、自分の半分程度しか生きていない、人生経験すらまならない俺達に、深々と頭を下げてきた。世界に名だたる賞金稼ぎが、俺達に懇願してきた。

そこまでされたら、俺は、俺は

俺はため息をつき、ルーの青色の後頭部を見下ろしながら、

「……分かつた。考えとく」

第七話

時間に感情はない。

良心も悪心も、喜怒哀楽すらない。

ただ淡々と、刻々と、流れしていくのみ。

どんなことがあるうつと、その流れは変わらない。

つまりは、そういうことなんだろう。

あんな出来事 があつたといふのに、世界は変わらず回っていく。
俺達とはおおよそかけ離れた場所にある社会の主軸は、何の影響
もなく今日も今日とて今日を始める。その流れは変わらない。変え
られない。変えられやしない。

もつとも、ルーやウエリィには十一分を過ぎるほどに感情が
あり、そう簡単に立ち直れるはずもない。動く気力があるはずもな
い。動けるわけがない。

だから、一人は現在自宅療養中である。

家にこもり、必死に精神を安定させている。

しかしそれでも時間は過ぎ、社会は回り、つまりはギルドの依頼
も止むはずもない。そして社会で生きる以上、その仕事を止めるわ
けにもいかないのである。
だから俺は、今日もまたギルドの仕事を請け負い、外へと繰り出
すことになる。同じような状況であるギーンと共に。

つまり俺は、一人が立ち直るまでの間限定で、ギーンと一緒にチ
ームを組んだのだ。

昨日のうちに次の仕事も決定。今朝方八時にギルドで待ち合わせ
をし、そこから馬車停留所へと、ギーンと並んで歩いている。ここ

つとのシーショットなんてこいつのは恐らくこの前遺跡を散策した時以来だろ?が、まあ、別段やりづらいなんていふこともなく、特に不満はないがね。

俺は、すました顔で隣を歩くギーンをチラッと見やりながら、

「……しかし、まさかお前と組むことになるとはな」

「ふふふ。そうですね。僕も驚きました」

苦笑のような愛想笑いのような顔をするギーン。

「まあ、僕としてはこれはこれで新鮮で面白やうなのでいいんですね。……僕自身が聞くのもなんですが、あなたはよかつたんですか?」

「……正直、ルーが立ち直るまで休むつてこいつ選択肢もあつたんだがな。あいつの面倒も見てやらなきやならないし」

「そうですね。僕もお姉ちゃんのこと見てなきやいけない気もするんですけど」

「……いいのか?」

「はい。ワイトさんもいますし、それにムツナさんもちゃんと見ておいてくれると言つてくれたんで」

「ムツナ? ……やけにルーとウヨウヨのことを気にかけてくるみたいだが

「あいつ、そんなに面倒見がいい奴なのか?」

「さあ? 一年ちょっととの付き合いなので、そこまで深く彼女のパーソナリティは知らないんですが」

ギーンは首を傾げつつ、

「ですが、半ば強引に『私が看病してあげる!』って押し切られてしまいまして。しうがなく任せてしましました。ルーさんの方もちょくちょく見に行くと言つてましたよ……というか、ダルクさんの方は気持ちの整理はついてるんですか?」

「リンクさんが推してくるもんだから、仕方なく請負つたつて感じだ」

「僕も同じ感じです」

ギーンは軽く嘆息しながら、

「……ですが実はリンクさんは、こういう状況になる前から、僕とあなたを組ませたかったみたいですよ?」

「俺とお前を? 何でまた?」

「リンクさん曰く、年少組の中で僕たちは特にムラがないんだそうです。ギルドの仕事において、常に同じクオリティを達成していくのは重要なファクターですからね。僕とあなたはその点において秀でているということなのでしょう。この前なんか、リンクさん、『ギーン君とダルク君が組んで私が育てるなら、世界屈指のチームにすることも可能よ』とまで言つてましたよ。……どこまで本気なのが分かりませんが」

「……そりやまた、大きく出たな」

俺は半ば呆けながら答えた。

……いやまあ、あの人気がギーンに目をつけるのは分かる。この年でギルドに関するほとんどのことに精通し、どんな状況でも物怖じしない状況分析能力を持つている。そこら辺にいる平の賞金稼ぎと比べても、能力が突出しているのだ。こいつの将来に期待してしまうのも、無理のないことだと思う。

しかし、その相方がなぜに俺なんだ?

ロットではなく、なぜ俺なんだ?

……もしかしたら、観察眼の鋭いあの人のこと、俺の裏の顔である『闇鳥』についても、少なからず気付いているのかも知れない。確信はなくとも、何となく感じているのかも知れない。俺が道を逸れていること。アンティイさんが最近やたら俺に構つてきたりと、そういう兆候はあるだろう。

まあ、証拠さえなければ、当分は確証は持たれないはずだ。

一応は大丈夫なはずだ。

大丈夫なうちは、仕事を続けさせてもらおう。

いつまで続くのかは知らないが。

と、そんなことを考へながら歩こんでいる、たけひの、ゆづやく停留所が見えてきた。

果たして空いている馬車はあるのかと思いながら馬車の方へ近づこうとして、ふいに、その手前の木陰から、人影が幽霊のよつこすと現ってきた。

慌てて立ち止まつゝ、一体全体何者だと視線を向けると、

それは ウエリイだつた。

いつもの見慣れた黄色いドレスを身につけながら、しかし パーマをかけてないんだろつ ただの金色ロングヘアの髪型をしたウエリイが、俺達の前に現れた。

「お姉ちゃん！ どうしたの？」

驚いた顔をして、ギーンがそつちへと掛けしていく。

ウエリイは、いつもの瞳の強さが微塵もない顔でギーンに「……

ちょっと」と答えると、今度は俺の方に顔を向けてきて、

「じきげんよう、ダルク」

「え？ あ、じきげん……よつ……。というか、どうしたんだ、お前？ まさかお前も着いて来るのか？」

「……え、まだ気分があまり優れないの、それは無理です。着いていつも足手まといにしかならないでしょつ。ただ――」

いつもの一割にも満たないような声量でそう言いながら、ウエリイはギーンの肩にそつと手を置き、

「 私が着いて行けないので、弟の面倒をちゃんと見ていただくなよつ、お願ひしようと思いまして」
「め、面倒つて！ そんなこと言つたために来たんですか！ お姉ちゃん！」

ギーンは顔を真っ赤にして、見たままの過保護な姉に反抗する弟の表情で、

「僕もいつもお金稼ぎなんだから……こつまでもナビも扱いしないでください！」

「…………まあ、俺もパートナーとしてできる限りサポートするし、ギ

ーンもできた奴だ。そう心配することもないだろ。それに、

今回の仕事はただの荷物運びだ。危険なんて何もない。お前も安心して療養してろ」

「そうだよ、お姉ちゃん！ も、僕は早く馬車の手配しなきゃなんないんだから。お姉ちゃんもさっさとウチに帰って、休んでてくれさい！」

ふいっとそっぽを向いて、ギーンは停留所の方へさっさと行ってしまった。いつものこましゃくれた態度とは違つて、いつになく子供っぽい感じのギーン。まあ、なかなかに微笑ましい姉弟関係と言うべきか。

俺は、ずんずん離れていくギーンの背中を立ひげへじて眺めているウエリィに、

「…………ま、そういうわけだから。この前のことで心配になるのも分かるが、弟のこと信じて待つてみよ」

「ええ、そうですわね。弟のこと、よろしく頼みます。それから

」

ウエリィは、今まで聞いたこともないような弱々しい声で、

「…………このようなこと、わたくしがあなたに頼める義理はないのかもしそませんが、しかし……」

「何のことだ？」と俺が返答する間もなく、いきなりウエリィは俺の腕を掴んできた。

「…………お願いします！…………お願いします！…………わたくしの一生で一度の願いです！…………いつでもいいです！…………いつでもいいですか、いつか、いつか

ロジット様の仇をとつてください……」

……か、仇つ？

「……以前からあいつの存在を知っていたわたくしが前に止めていれば、こんな状況にならなかつたのかもしません。わたくしに責任があるのかもしません。……でも、本当のところ、わたくしにはどうしようもなかつた。わたくしには……なす術がなかつた。実際に今まで三度、あいつに勝負を仕掛けたこともありましたがすべて一秒足らずで勝負が決まつてしましました。……いえ、勝負にすらなりませんでした。勝負と呼べるものではありませんでした。ただ顔見知りだという、それだけの情けで、私はあいつに殺されなかつたに過ぎません。生かされていたに過ぎません。……もうわたくしには、あいつを目の前にして、平静を保つて必死に身震いを押し殺すことしかできませんでした。どうしようもありませんでした。……しかし」

ウエリイは、俺の腕に顔をうずめてくる。

そしてその白い首筋が目に入つて、改めて俺はその首筋や手、腕のあちこちに傷があるのに気付いた。透き通るような肌の上に、赤い筋が何本も浮かび上がっている。爪で引っかいたような傷跡。あの日の時ウエリイが、無意識に　あるいは心の痛みを鈍らせるために　自分で自分を傷つけた、その名残……。

「しかし、あなたなら　あいつを目の前にしてそれでも物怖じせず、正面から啖呵を切れたあなたなら　もしかしたら、あいつを止めることができるものかもしれない。あいつを殺すことができるかもしない。……無責任な願いだとは重々承知しています。対価は何でも払います。わたくしのためじゃなくていい。ロット様の……ロット様のために　どうか、仇を討つてください！」

叫ぶようなわめくような、ウエリイの懇願。
痛いほど、俺の腕を握り締めてくる。
濡れた袖口が、冷たかった。

今回の仕事は『手紙の受け渡し』。

現在『カザミドリ殲滅作戦』において暗躍しているとある人物と、指定された場所で接触し、ブツを渡し受け取るという、それだけのミッションである。

ようは、ちょっと遠出のお使いのようなものだ。

周囲に最低限の警戒をしていれば、それだけで事足りる仕事。自分から首を突っ込んだり足を踏み外したりしない限り、難点はまったくない。まあ、俺達のような新米賞金稼ぎが任される仕事の危険度などこの辺りが闇の山で、この前のコロノ山での搜索は、ただ単に運が悪かった。といつより、奴らに目をつけられていた俺達に原因があつただけだ。

ちなみに、その「指定された場所」といふのは、グランデル山である。

これまたこの前來たばかりの場所であるが、しかし賞金稼ぎといふのはひつきりなしにあちらこちらへ移動する仕事であり、逆にこの周辺で言つたことがない場所は皆無に近いので、たいして偶然だとも思わない。一年もこの仕事をしていれば、むしろ行つたことのない場所に出向く方が珍しいのである。

ことこのグランデル村に関しては、遠方へ行く場合の中継地としても立ち寄ることが多い。俺がここを訪れるのはこれで五回目であり、おかげでこの村の宿屋のおじさんとはすでに顔見知りになつてゐるのである。どれくらいの新密度かといふと、

「おや、ダル君か。いらっしゃい」

と、（発音したくいのか知らないが）名前をはょつて呼ばれるくらいだ。……まあ、それくらいは別に気にしないが。

俺はカウンターの方に歩を進めながら、

「どうも、『無沙汰します』

「一泊かい？まあとりあえず、ここに記帳してくれ

」この宿屋の主人たる白ヒゲのふくよかな体型のおじさんは、いつも通りのこじやかな対応をしつつ、カウンター越しに台帳を差し出してきた。なので、俺は備え付けのペンを手にとつて、そこにいつも通りの必要事項をつらつらと記入していく。

「ウチを利用してくれるのもこれで五回目だつたね？もづダル君も常連さんだなあ。ようし、特別に料金一割引きにしてやろう」

「え？そんな、悪いですよ」

「いやいや、遠慮しないでくれ。新米の賞金稼ぎってのは、懐が寂しいんだろう？」

……よく知ってるなあ。俺がこの宿をひいきにしてるのも、サービスがまともで比較的料金が低いからなのである。完全に見透かされてるな。

「図星か？かつかつか。まあ、気にするな。私の勝手な好意だ。実は私の息子も君くらいでね。頑張ってる少年を見ると、つい情が湧いてきちゃうんだ」

「息子さんがいらっしゃるんですね？」

「ああ、出て行つてしまつたんだがね」

白ヒゲをなでながら、おじさんは苦笑。

「有名な賞金稼ぎさんに弟子入りするつて言つてね。一端の賞金稼ぎになるまでは帰らないとまで豪語して、出て行つてしまつたよ。五、六年くらい前のことだがね。……果たして今はどうしているやら」

「そ、そなんですか……」

「ま、いつかあいつがひょっこり帰つてくるんじゃないかと待つてるわけで、逆に人生の楽しみが一つ増えたとも言えるんだがね。かつかつか」

お腹を揺らして笑うおじさん。

何とも前向きな捕らえ方だ。同じ失踪にしても、ルーの場合とは大違い。……まあ、状況が全然違うし、単純に比べるのも不躾だとは思うが。

「で、どうする？ もう部屋に入るかい？」

「いえ、ちょっとこれから用事があるので、予約だけしておいて、

ちょっと出かけてきます」

「そうかい。んじゃまあ、大きい荷物だけ預かっていいわ

「お願いします」

そう言って、俺とギーンは背負っていた荷物をカウンターに預け、宿屋を後にした。

今回の仕事において、俺達は相手方について何も知られていない。

これも荷物運びの仕事にはよくあることで、余計な情報を知ってしまうと、そのせいで命を狙われてしまうこともある。危険が増してしまったのだ。だから俺達は特に不審に思つことなく、この条件でこの仕事を請負つたのである。

ただ、何も知らないと相手と落ち合つこともままならないので、当然の「」とく時間と集合場所だけは決められてくる。そして時間通りにその場所にたどり着いているかどうかが本仕事の信頼性に関わるものなので、俺達は余裕を持って村を出て、

グラントル山に向かつた。

日没まであと数時間はあるだろうという時刻。

ふもとの村を眼下に見下ろせる崖の間際に、ぽつんと立っている木。ここが『指定された場所』である。

約束の時間まであと十五分ほどあり、もしかしたら相手方はまだ来ないかも知れないと思いつつそこに到つたわけだが、俺とギーンがそこに赴くと、すでに一つの影があつた。

このグラントル山は何の趣もないハゲ山で、ここに散歩やハイキングや登山に訪れる人なんてまずいない。この山中で他人に会うこ

とすら珍しいことで、間違いなくこの一人こそが今回の取引相手だらう。

俺の隣を歩いていたギーンも同じ結論に達したようだ。

「どうも、お早いですね」

と、二人の方にすたすたと近づいていく。

そのギーンの後方、一体全体こんな危険そうなミシションを遂行しているのはどんな人物なんだと思いながら、俺も一人の方へ近づいていくつて

そして俺は驚いた。

片方は青白い髪のある種豪快そうな笑顔を浮かべた、四十、五十年代のおじさんで、それはどうでもよかつたのだが、もう一人それは俺が誰よりも見知っていて、誰よりも共に時間を過ごしていた、長身で細身で眼鏡をかけた青年

我が従兄弟、ラキだった。

「…………え？…………ラキ…………？」

と、それだけを喉から搾り出すのが限界だった俺の反応に、ラキは五年以上毎日のように俺に向けていた穏やかな笑顔で、

「ふふ。お久しぶりです、ダルク」

数ヶ月前と何ら変わらない声で、そう言つてくる。

その俺のリアクションにきょとんとしたギーンが、

「…………？　お知り合いですか？」

「ああ。…………というか、従兄弟だ。この前まで一緒に住んでたんだが…………」

「え？　そうなんですか？…………はあ、確かに似てますね。まるで

十年後のダルクさんを見るようです」

驚いた顔で、まじまじとラキを観察するギーン。

ラキはそこにこやかな顔をギーンに向けて、

「ふふ。初めてまして。ダルクの従兄弟のラキと言います。よろしく。

……あなたがギーンさんですね？　ふふ。ダルクから聞いてますよ。

その歳でアステルギルド随一の頭脳派なんだとか

「や、そんな、滅相もありません」

ギーンは照れ笑いしながら、

「というか、『カザミドリ』の情報収集をなさつてるんですね？」

ラキさんも賞金稼ぎなんですか？」

「いえ。数年前にちょっとやつていたこと也有ったんですが、今は休業してるんですよ。ただ、腕には少々覚えがあるので、護衛のようなことをやつてるんです」

……ぼやかすような言い方をするラキ。そりやそうだろう。自分が世界に名を馳せる殺し屋『闇蛇』だなんて、そう簡単に名乗れるわけもない。

ラキは話題を変えるように、

「……それよりもまず、こちらの方を紹介しましょ？、こちらは

「はつはー、いやいや、初めて

今さつきまで後ろで傍観していた青白頭のおじさんが、壮大な笑顔ですりつと前へ出てきた。

「どうもどうも、君がダルク君か。ラキ君から話は聞いてたよ。自慢の弟だそうで」

そんなお世辞を並べながら、そのおじさんは俺に右手を差し出してきた。つられるように俺も手を差し出し、ギュッと握手をする。

……痛い。力入れすぎだ、この人。

「それに、ダルク君、君にはウチの娘も世話になつてるようだねえ。いやいや、その歳にしてずいぶん落ち着いた少年だ。実直そうだねえ。将来が期待できそうだよ。ふーむ……君みたいな子がウチの娘を貰ってくれれば、私も安心なんだがねえ？」

……どうしたことだ？　娘？　世話になつてる？　俺に？　……

……つて、ま、まさか、この白髪交じりの青い髪、もしかして、もしかしてもしかして

「 私はコルート・シア。ルーの父親だよ」

「 る、ルーのお父さんつ？」

思わず素つとん狂な声が出てしまった。

「 ……もとい、あなたがコルート博士なんですか？」

「 いかにも」

コルート博士は陽気な笑顔で大きく頷いた。

コルート博士。

五年ほど前、『銀石』の作成に成功したアステル国研究所の元所長。しかしその研究成果によりカザミドリに狙われることになり、家族の前から姿を消した人物だ。

そしてルーの父親でもある。

元々ルーが賞金稼ぎを始めたのも、情報の流れが大きい場所に身を置き、さらに入探しのスキルを上げて、いつかこの父親を見つけ出すためだったのだ。

この父親との再会が、ルーの悲願なのだが

「 ……というか、あなたがカザミドリの情報収集を行っていたんですか？」

「 ああ。身を隠すついでに、逆に敵について色々調べてたんだ。このラキ君に護衛してもらいたがらね」

「 ……そうだつたのか。

確かに、この前のリンクさんの説明には「『銀石』の研究は七割が終わっている」というのがあつたが、どうか、そうだよな。どこまでできれば研究の七十パーセントが終わることになるのか、なんてことは、専門外の人間にわかるわけもない。というか、百パーセントを知っている人間じやなきや、七十パーセントを目算できるとも思えない。それが分かるのは、この世界で唯一『銀石』を作ったことがある人、コルート博士。この人にしか扱えない情報だつたんだ。

俺は納得しつつ、博士の外見を眺め、

「……無事だつたんですか？」

「ああ。表立つて行動できないのは相変わらずだがね」

「……無事なら無事と、ルーに伝えてあげることはできなかつたんですね？ ルーは、今までずっとあなたを探すために一生懸命だつたんですよ？」

「ああ、そうだね。娘には悪いと思つてゐる。……ただ、『失踪』そして『生死不明』としておいても、わかつた方がよかつたのさ。家族を人質にとられる心配があつたしね」

「……でも

「それに、『コンタクトを取る術がなかつたんだ。あの娘の周りにもマークがついてたりしてね。だから、いい機会だから、君からあの娘にそれとなく伝えておいてくれないか？』『父さんは無事だ。すべてが解決したら会おう』ってね」

「……はあ、分かりました」

結局まだ再会するわけにはいかないのは何ともじれつたいが、生きてることがわかつただけでも、ルーには朗報だらう。これであります、少しは落ち着くだろうか。

と、コルート博士はギーンの方を振り向き、

「……まあ余談はこれくらいにして、早速仕事の方に移りつか

「あ、はい。ええと……これです」

ギーンはカバンからギルドで渡された封筒を取り出し、コルート博士に差し出した。

博士はそれを受け取り、

「ありがとうございます。助かるよ。ここには援助資金も入つててね、これがないと食事ができなくなるんだ で、こっちから渡すのは、この手紙だ。リンクさんに渡してくれ。よろしく頼むよ」

そう言つて、今度はコルート博士がギーンに封筒を渡す。メモ帳

ぐらいの、やや小さじものだ。

それをカバンにしまうギーンを横目で見つつ、この中にほんの

情報が書かれてるのかと思つていると、コルート博士が俺の疑問を汲み取つたよ。」

「『や』に書いてあるのは、カザミドリの最近の動向だ。……まあ、君らもそのうちギルド本部の人間から聞くことになると思うから暴露しちゃうとね、奴らの『銀石』の研究は終わつたらしー」

「…………終わつた?」

「つまり、完成したつてことだ」

「あいつら、最近になつて『白石』と『黒石』を回収し始めててね、その研究スピードが飛躍的に上昇してたんだ。いつ完成するのか冷や冷やしてたんだけど、一昨日カザミドリの研究施設に潜入したところ というか、ラキ君に潜入してもらつたところ 研究は終わつてた。完成してたんだ」

「…………じゃあ、あいつらは、その『複数の国を相手に戦争ができるくらいの戦力』つてのを手に入れたつてことですか?」

「…………やべ、そういうこと。…………本当、まいつたよ。私が関わらなければもう少し時間がかかると思ってたんだがなあ…………」

類をほりほりかきながら、ため息をつくコルート博士。

「…………といふか、博士。一つお尋ねしたいんですけど」

不意に、ギーンが質問を投げかけてきた。

「その『銀石』の性能つていうのは、一体何なんです? 一度開発したことがある博士なら、ご存知なんでしょう?」

「まあね。…………ただ、これを教えちゃうと、他の人間までこれが欲しくなるかもしないから、あんまりおおやけにしたくないんだけど

ど

腕を組んで思い悩むような前置きをした後、コルート博士は、

「…………まあ、それを知らないと逆に君らが危険になるから、情報として『ええといった方がいいかな。…………ええと、知ってるかどうかわからないけど、『銀石』っていうのは、『黒石』と『白石』を混ぜ合させて作るもんなんだ。まあ、両方とも扱いづらい『石』だからね。」

混ぜ合わせるために色々なデータとノウハウが必要なんだべ」「へえ……」

ギーンは感嘆を漏らす。

それを以前にあいつから聞かされていた俺は、別段驚きはないが。

「それはつまり、無限のエネルギーと無限の無を混ぜ合わせるということ。まずは、プラス無限大とマイナス無限大を足し合わせるようなものだ。計算不能。黒と白の接合部で、計り知れないエネルギーが一瞬で生まれ、一瞬で消える。これによつてね

空間が歪むんだ」

「……空間が?」

「そう。そしてこの『銀石』が発動すれば、その周囲の空間にあるものすべてが、形や質量や強度によらず、あらゆるすべてものが破壊され、消え去る。シールドを張つても、その壁」と消されちゃうわけだからね。文字通り空間が壊される。巨大な城も爆弾一個で消滅させることができる。防ぎようがない。無敵の攻撃になるわけだ

「……む……無敵」

ギーンは声にならない声で、

「……だ、だからカザミドリは躍起になつてそれを開発し、国はそれを阻止しようとしてるんですね」

「そう。そうこう」と

ゆっくりと頷くコルート博士。

……そりや、確かに危険だ。あんな危ない集団にそんなものを使わせたらどうなるか、分かつたもんじやない」というか、ここで一つ、俺の中に疑問が生まれた。

「……あ、あの、博士」

「ん? なんだい?」

「というか、ダルク君。博士、なん

て呼ばずに、さつきみたく『お義父さん』って呼んでくれて構わないんだよ？ 我が息子よ」

「『お義父さん』なんて言ひません！『ルーのお父さん』です！……とこりか、『銀石』の開発が終わつたなら、あいつらはもう博士には用はないはずじゃないんですか？ なら、もひ自由に動けるんじゃないですか？」

「はつは、それがさあ、ちりこ面倒くせになつちやつてね」
ゴルート博士は、相変わらずの豪快な笑顔に困つたような雰囲気を交えて、

「実はその『銀石』つてのがさ、その構成からしてすぐ不安定なものなんだ。十度くらい温度を上げただけですぐ発動してしまつぐらいにね。だから、普通の銃や砲台で『銀石』を飛ばすことができないんだ。発射させた瞬間、砲台の熱で『石』が発動してしまつ」
「……じゃあ、『銀石』は遠距離攻撃には使えないってことですかね？ なら安心していいんじや」

「それが、それでもないんだ。熱を生まずに弾を発射できるシステムがあるんだ」

「何です？」

「ルーの側にいた君なら知つてるんじゃないかな？ それは

『青石』の銃、『サイキ』だよ」

「あ…………」

思わず声が漏れる。

ゴルート博士は、だらしなく口を半開きにしてしまつた俺をこやりと見やり、

「さう。私がルーに渡した銃『サイキ』は、『青石』の性質を利用してある。『銀石』は『白石』の影響を『黒石』で相殺しているからね。発射する瞬間には熱をほとんど生まないんだ。だから逆に『サ

イキ』が熱で壊れることもない。あの銃ならば、その不安定な『銀石』を問題なく飛ばすことができるんだよ」

「……つてことはつまり、今狙われてるのは……」

「そう。『サイキ』および、私の頭の中にあるそのシステムの設計図だ。そのせいで、最近ルーの周りのマークも厳しくなってるんだよ。あの娘と一緒に行動してて、誰かの視線に気付いたことはなかったかい？」

誰かの視線？…………あつた。

以前、赤雷鳥のタマゴを取りにコロノ山に行つた時、馬車停留所の側で変な視線を感じたことがあった。あれはてっきりウエリィのものだと思っていたが…………そうか、違ったのか。もしかしたら、イヴが言つてた「最近君らの株が上がってきてる」というのも、そういうことだったのかもしれない。

「はっは。まあそういうわけで、私はまだルーに会うわけにはいかないし、私自身もまた姿を消さなければならないわけだ。…………まったく、科学者つてのは難儀な職業だよねえ。まあ、好きでなつたんだけどね」

と、ここで「ルート博士は腕時計を眺め、

「じゃあ、貰うものは貰つたし、渡すものは渡したし、とりあえずこの辺りで別れようか。あんまり一つの場所にいるのも危険だしね。じゃあ、ラキ君」

「そうですね。行きましょうか、博士…………と、その前に一つだけ

「そう言つて、ラキがおもむろに俺の近くに寄つてきた。

そして吐息が頬にかかるくらいに俺の耳に顔を近づけてきて、博士にもギーンにも聞こえないくらいの小声で、

「……ふふ。段々雰囲気が出てきましたね、ダルク。そろそろ社会勉強も終わりにして、『本職』の仕事を始めてもいい頃合ですよ。一つ名も貰つたことですしね。私が太鼓判を押します。ふふ。

あなたと肩を並べて、私達の『生業』に赴ける口を楽しみにしてますよ」

そう言つと、ラキは俺の耳元から顔を離した。

俺は頭を真っ白にしながら、その言葉だけを記憶に留める。

ラキは相変わらずの人当たりのいい微笑のままで俺に手を振り、ゴルート博士と共に山道を下りようと歩き出した その瞬間 だつた。

ドオグ、ゴゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオ

田の端に白い閃光が走り、同時に唸り声のような、耳に痛いほどの低音が鳴り響いた。

風が荒ぶ。

地面が揺れる。

何事かと思つて周囲を見渡し、そして崖の下に視線を向けて、ようやくその光と音と振動の発生源が分かつた。

数百メートル下、つい三秒前までそこにあつたはずの村が

黒いサラ地と化していた。

……何もない。

何も、ない。何も、ない。何も、ない。何も、ない。
ここには、何も、ない いや、無くなつた。何もかもが無
くなつた。

消えてしまつた。

刹那で、消えてしまつた。

あっけなく、消えてしまつた。

家も、店も、宿も、門も、道も、柵も、塀も、井戸も、食べ物も、
飲み物も、日用品も、美術品も、本も、草も、木も、花も
そして人も。

つい数分前まではあつたのに。あつたはずなのに。

ここには民家があつたはずなのに。そこで家族が暮らしてたはず
なのに。

ここには店舗があつたはずなのに。そこで買い物客が談笑してた
はずなのに。

ここには宿屋があつたはずなのに。そこで休んでいる旅人がいた
はずなのに。

ここには食堂があつたはずなのに。そこで料理に舌鼓を打つてい
る人がいたはずなのに。

ここには酒場があつたはずなのに。そこで宴会を開いている人が
いたはずなのに。

ここには花屋があつたはずなのに。そこで花を愛でている人がい
たはずなのに。

……そう言へば、さつきの宿屋のおじさんはどうした？ どうな
つた？ あの白ヒゲの笑顔はどこへ行つた？ せつかく顔見知りに
なつたのに。せつかく名前を覚えてもらえたのに。せつかく常連に
なつたのに。せつかく一割引してくれたのに。あのおじさんはずつ

と……息子の帰りを楽しみに待つてたのに。

宿屋の前の道でよくサッカーをしてた坊主頭の男の子はどうした?
? どうなった?あの無邪気な笑顔はどこへ行つた?見かける
たびに「お兄ちゃんも一緒にやろうよ」と笑いかけてくれたの
に。

この村に来るたびにいつも通つてたレストランで「うちのお勧め
は魚料理だ。食つてみなよ。驚くほどうまいからな」と言ってくれ
た料理長はどうした? どうなった? あの自信満々な笑顔はどこ
へ行つた?

よく道を聞きに行つていた駐屯所で「グランデル山にやあ水汲み
場が一つもないからな、飲み水は多めに持つてつた方がいいぞ」と
教えてくれた自警団の人はどうした? どうなった? あの気遣う
ような笑顔はどこへ行つた?

どこへ行つた? どこへ往つた? どこへ逝つた?

消えた、のか?

馬鹿な、馬鹿な、馬鹿な

そんな馬鹿な。

さつきまでここにあつたのに。あつたはずなのに。

けれど

それはもはや夢か幻だつたとしか思えないほどには何もない。

何も、ない。何も、ない。何も、ない。何も、ない。

まるで雨の降らない荒野のように、えぐれて焦げた土しか、ここ
にはない。

「これほどとは……」

俺の横、呆然としたギーンが、自分に語りかけているよつに声を
出した。

「まさか、『銀石』の破壊力がこれほどだつたなんて……。半径數
十キロを、すべて無に帰してしまって……」

「……つてか、どういうことなんだ、これは?」

俺はギーンに問いかける。

「どうやつたらこんなことができるんだ? 『銀石』は発射できな
いはずなんじやないのか?」

「恐らくとしか言いようがありませんが 」

ギーンはなおも黒い地面を見下ろしながら、

「 ここに『銀石』を運び込んで、この場所で人為的に発動させ
たのでしょうか?」

「何だ? この村に『銀石』を設置して、遠方からそれを射撃した
つてたつてのか? それとも誰かが発動させるのを待つてたとか?」

「……え。『銀石』はあくまで貴重なものですし、ギルドに『カ
ザミドリ殲滅作戦』が届いて以降はどこも結構厳重に警戒されてま
したからね。『銀石』を放置するなんてリスクーなことはしないで
しよう」

「……じゃあ、どうやつて」

「恐らく、ですが 」

ギーンは言ひついでに声を溜めたあと、

「 自爆です」

「 じ、自爆つ?」

俺は驚愕しつつ、

「何でまた、そんなことをしたんだつ?」

「十中八九、この『銀石』の恐ろしさを知らしめるため、そしてカ
ザミドリの脅威を知らしめるためでしょ。この所業に恐れをなし
た国に対して、有利に交渉できると田論んでいるかもしません
「そんな……ことのために 」

奴らは村を一つ消したのか? 何百人の人間を消したのか?
そんな、そんなことのために……。

俺の脳裏に、リンクさんの言葉がフラッシュバックする。

『複数の国を相手にして戦争を起こせるだけの戦力』

あの時は、このセリフを セリフ としてしか理解してなかつた。認識してなかつた。いまいち想像できていなかつた。イメージできていなかつた。

しかし…… そうだ。 そうなんだ。

国に対抗できる戦力。 戰争を引き起こせる戦力。 国を潰すことができるだけの戦力。 国民を皆殺しにすることができる戦力。 つまりは、そういうことなんだ。

村一つを 数百人の人間を一瞬で消せる。

俺の親類だろうが、友人だろうが、知り合いだろうが、敵だろうが、他人だろうが、わけなく、難なく、関係なく、すべてを消し去る。 消し去ることができる。

それは、そういう 力 のことだつたんだ。

リンクさんは、そういう 力 のことを言つてたんだ。

俺は理解した。 ようやく理解した。 目の当たりにして、理解した 理解しても、すでに手遅れだが。

……いや。あの時俺がちゃんと認識していたところで、何も変わらなかつただろう。 どうにもならなかつただろう。 俺一人にはどうしようもなかつただろう。 なす術がなかつただろう。

それだけの戦力 殺戮能力なんだ。

ふと、

「…………あるいは」

ギーンが顔を上げ、俺の方を見てきた。

「ここにカザミドリの敵になる人間がいて、その人を消すために講じた策である可能性も否定できません」
カザミドリの敵？ ……つて、まさか

「 クルート博士！」

「…………いえ、それは違うでしょ？」

ふるふると首を横に振り、ギーンは否定してきた。

「あいつらの目的は、クルート博士に『サイキ』のシステムを聞き

出すこと。消してしまっては意味がありません。彼らの標的は別でしょうね。……とはいえ、これだけのことをしたんです。この結果を確認するためにカザミドリの人間がこの近くに来ている可能性もあります。博士とラキさんがあの後すばやく身を隠したのは正解だったでしょう」

そう。

この爆発があった直後、ラキは俺に目配せをして一つ頷くと、博士を抱えて山の奥の方へ身を隠してしまったのだ。どうして山上へと登つていったのか少々疑問だったが……そうか。ラキはある瞬間でそこまで考えが至つていて、そういう選択をしたわけか。呆れるほど思考が早い。

しかし

「あいつら、こんなことをする道具と意思があるってことは、世界中どの町も、今にも消される可能性があるってことじゃないか。……くそっ、ヤバいじゃないかよ」

もはや誰の形見も遺骨も、思い出すら拾えないような黒い大地を、俺は再度見回した。

ここには、もう何もない。

何も、ない。何も、ない。何も、ない。何も、ない。

ここには、もう絶望しかない。

どうしたって、どうやつたって、笑い話には転ばない。どう転んでも、笑えない。笑えやしない
絶望するしかない。後ろ向きにしか、ならない。

……こんな光景を見て、それでもあの厚顔無恥男ロットなら、前を向くことができるのだろうか？ 考えなしなくせにいつもギリギリでピンチをかわしていくあの男なら、どうにかできただろうか？ あの男がここにいれば、どうにかなったのだろうか？ 「はつはつは」という高笑いと共に、解決できたのだろうか？

……俺は、こんな状況なのに あるいは、こんな状況だからこ

そ

あの底抜けた笑顔が、やたら懐かしかった。

グラントル村からアステルに帰つてきて、俺がまず最初にしたことは、ルーへの報告だった。

ギルドへの手紙運びおよび報告はギーンに任せたおいて、俺は直接ルーの家へ向かつた。これがロットだつたら「面倒くさい雑用をひとに任せんな！」とぶつくさ言つてきそうなものだが、ギーンがそんな反応をするわけもなく、「ルーさんに早く伝えてあげてください」と快く承諾してくれた。何で俺は今までこいつと組まなかつたんだろ？……と後悔するほどの人の好さである。

俺が家を尋ねると、ルーは開口一番「ギルド、辞める気になつてくれた？」という質問をぶつけてきたが、俺はそれをやんわりとかわしつつ、「それよりもさ、すんごい朗報だ」という前置きと共に、コルート博士が生きていること、そしてすべてが片付いたらまた会おうと言つていたことを伝えてやつた。

それを聞かせた瞬間、ルーはペたりと膝から崩れ落ち、一体どうしたのかと俺は慌てたのだが、その後笑顔で泣きじやくり始めたのを見て、俺は安堵した。

ルーは泣き笑いながら一緒に聞いていた母親、祖父と抱き合い喜びを分かち合つており、この感動の場面を他人が邪魔するのも忍びないということで、俺は静かにルーの家を後にした。

そして一応、俺もギルドへと向かつた。

カラソカラソとベルを鳴らしながら中に入ると、諸々の手続きがちょうど終わったところらしい、ギーンも帰り支度を始めていたところだった。

俺は、リュックを「よつこせ」と背負つているギーンの方へ寄つていや、

「もう終わったのか？」

「はい、一通り。グラントル村についての報告も済ませました」

「そうか。悪かつたな、任せちゃつて」

「いえいえ」

ギーンは笑顔で横に手を振り、

「……それより、ちょうどよかったです。夕飯と一緒にしませんか？」

誘われたんですよ」

「誘われた？ って、誰に？」

と、俺がギーンに尋ねたところで、俺達の方に割つて入ってきた人物。

そろそろ夜風が涼しくなる時期だというのに、いまだTシャツにハーフパンツ、サンダルといういでたちで、茶髪にバンダナを巻いた、二十台後半くらいのお兄さん アンディさんだった。

アンディさんは、俺とギーンの肩にぽんと手をのせ、「おう。ちよっと、付き合つてくれ」

「そうか。ゴルート博士は生きてたか……」

アステル城下町の外れ、今まで俺はその存在も知らなかつた食事どころの個室で、俺とギーンを目の前に据えたアンディさんに、俺は今回のグランデル遠征の顛末を伝えた。

俺は食べ終わつたビーフシチューの皿をテーブルの脇に寄せながら、

「アンディさんは知らなかつたんですか、そのこと？ ラキから聞いたりしてなかつたんですか？」

「ああ、あいつとはここ数ヶ月連絡を取つてなかつたからな。あいつが今どんな仕事してんのか知らなかつたんだが なるほど、

ゴルート博士の護衛ねえ」

アンディさんは腕を組み、納得するよつて一つ頷いて、

「しかし、これですつきりしたぜ

「すつきり？ 何がです？」

「何でここ最近、アステルで隠密つぽいやつを見かけることが多かつたのかってことだ」

「隠密つ？ この町にもいたんですか？」

「ああ、まあ監視するだけみたいで、殺氣はなかつたんだがな。たあんまり鼻につくんで、知り合いでそいつらのマークをさせてたんだが。……早めに手を売つておいて正解だったな。いつの間にか『サイキ』をぶん盗られて奴らの戦力をアップさせてたんじゃ、目も当てられねえし」

「そ、そうだつたんですか……」

……いや、本当に危なかつた。『銀石』が完成したのが一日前。その直後からカザミドリが『サイキ』の奪取に本格的に乗り出していたとしたら、本当に間一髪だつた。アンディさんの判断の早さに感謝するばかりである。

俺は心づちで身震いしながら、

「あ、ありがと」「わざいました」

「くはは、いやなに」

アンディさんは、いつもながらの気持ちいい笑顔で高笑い。

「あいつらにこれ以上戦力を与えちゃあ、本格的にやばいからな。

……グランデル村のあの惨状、お前らも見たんだろ？」

「ええ……特等席で見ましたよ」

隣のギーンが、ほとんど笑つていよいよ苦笑いで頷いた。

「もし数十分のタイムラグがあつたら、僕とダルクさんまで巻き込まれてました」

「……そうか」

アンディさんは、テーブルの上のリキュールを一口ごくぐっと飲みながら、

「そりゃあ、危なかつたな。とりあえずお前らが無事で何よりだ

「ええ……。しかし、あんなことになるなんて……」

テーブルの木目を見つめながら、ギーンはため息のようになつく。

と、グラスをテーブルに戻したアンディさんが、

「…………六件」

「へ？」

「昨日、同じようなことが他に、全世界で六件起つてゐる。『トロネオ』、『ツバラ』、『ショーン』、『アラスタス』、『リリ』、『フウト』の六つだ。これら六つの町や村とグランデル村が、奴らによつて消されちまつた。その被害者は…………概算で十万人に及ぶ」

「じゅ、十万……」

俺とギーンは、同時に声を漏らした。

アンディさんは静かに頷き、

「ああ。それだけの被害が出てる。しかも、どこもかしこも中規模な人里が選ばれてやがる。……まったく、狡い奴らだ」

「城や大規模な城下町は狙われてないんですか？」

「ああ。……まあ、そんな怪しい人間が、警備が厳重な城の中や城下町にそつそつ入れるわけもないからな。アステルも当分は安全だろう。……ただ、奴らに多くの人間の命が握られてることには変わりない」

「…………命を…………握られる」

「そり。あいつらのさじ加減一つで何万人もの人間が消えちまうんだ。…………ちつ！ 僕達も色々注意はしていたんだが、いよいよ後手に回つちまつた」

忌々しそうな顔で、虚空を見つめるアンディさん。

ギーンは、オレンジジュースを一口こくりと飲み、

「…………しかし、こうなるといよいよ各国の軍が動くことになりそうですね。戦争…………なんて大規模な抗争にならなければいいんですけど」

「いや、国は動かねえよ…………とうより、動けねえ」

「え？」

ギーンは顔を上げ、きょとんとして、

「国が動かない？ どうすることです？」

「……向こうに『銀石』があるってことは、ようは人質をとられるようなもんだ。大々的に動いて、それが向こうにばれたら、その国の町や村が消されかねえ。人民を守るのが国の役割だからな。いや、強情な軍事国ですから、経済の混乱が起きるのを恐れて、そう簡単には手は出せねえはずだ。できて隠密行動くらいだろう」

「軍事国ですか、ですか……」

「ああ。こういう事態を回避するために、それぞれ色々動いてたはずなんだがな。後手後手になっちまつてる。……やっぱ大きい組織つてのは、どうしても動きが遅くなるもんだ」

「じゃ、じゃあ、どうするんです？」

疑問

「こうよ、むしろ追及するような口調で、ギーンは國が動けないんじや、誰がカザミドリを止めるつていうんですか？ このままじゃ、あいつらが野放しに」

「だから俺達がいるんじやねえか」

疑問

アンディさんは、シニカルな微笑をギーンに向けてきた。
「俺達、ギルドの人間なら 何も背負わず、各自が個人でしかない俺達なら あいつらを真っ向から敵に回せる。あいつらと戦えるのは、俺達賞金稼ぎしかいない」

「……でも、どうやって？ 攻撃しようにも、あいつらの動向が掴みきれてないんでしょう？」

「それが、おかげさんでな」

ギーンの疑問に、アンディさんはモノを含んだような笑みで、最近、奴らに関する情報が飛躍的に集まるようになったんだ

「……ゴルート博士からですか？」

「いや、別口の、もつと信頼できるところだ」 で、昨日までに、必要な情報はすべて揃つた。といふか、揃えた

「全部？」

「ああ」

アンディさんは大きく頷く

「あいつらの拠点は、すべて押された。もちろんカザミドリ本隊の居場所も」

「本当ですか！」

イスを揺らし、中腰になるギーン。

「ああ。おかげさんでな。ちゅうわけで、カザミドリ本隊の殲滅作戦を組むことになった」というか、組んでる。メンバーもすでに決まってる

「そ、そうだつたんですか……」

「ああ。それで、俺も本隊拠点の潜入組みになつててな。ギルドの総力を挙げて直々に戦いに行くことになった」そこでだ

アンディさんは、急に俺達を真っ直ぐ見据えてきて、

「本隊殲滅作戦に召集されたメンバーは、各々補充人員を連れてくることになつてるんだが俺はお前達を連れて行こうと考えている」

「お、俺達ですか？」

俺は思わず聞き返した。

「いや、いくらなんでもそりや無理があるでしょう。いや、諜報員としてギーンは分かりますが……でも俺は、足手まといにしかなりませんよ。アステルギルドには、もっと他にも腕に覚えがある人間がいるでしょう？　これは危険な作戦だつてのは、俺だつて理解してます。大体そんな独断、他の人の猛反発に会うのは目に見えるじやないですか」

「そうでもないぜ」

アンディさんは頬を引きつらせた笑みを浮かべ、

「リンクさんも同意してくれた。他の連中も、ダルク、お前が少々まともじやないってことには、薄々感づいてるぜ。まあ、まあ、十三番隊殲滅作戦の時に俺がお前を重宝しちまつたせいで、その疑

惑が濃くなつちまつたみたいだがな。とりあえず、反対する奴は誰もいねえ。問題はない」

その婉曲的な言い回しに、隣のギーンがいぶかしんだ顔で俺を見ている。

しかしアンティさんは、そんなギーンの表情を意に介することなく、

「とにかく、俺はこの作戦に命を懸けてる。そして成功させるために、お前らの協力が必要だと思つてる。だから、付いてくれねえか？」

懇願とつよつもむじろ諭すよつに面つてくるアンティさんは、

「……何でアンティさんは、カザミドリに関して、そんなに積極的なんですか？」

静かに問いかけた。

「十三番隊壊滅作戦の時だつて、アンティさん、何やら暗躍してたんですね？ やけに深く絡んでるよつな。……何かあつたんですか？」

「……まあ、な」

アンティさんは言ひにくそつに、口元を歪めながら、

「……実はよ、俺は今まで、三人ほど使いつぱしりを置いてたんだ」「使いつぱしり？」

「ああ。弟子……みたいなもんさ。そこまで本格的なもんじゃなかつたがな。ギルドにおけるイロハ、状況判断におけるノウハウ、そして戦い方を詰め込んでやつたんだ。俺も、あと数年したら第一線を退くことになる。その前に、次の世代の人間を育てておこうと思つたわけだ」

「はあ、それは意外でしたが…………しかし、それがカザミドリとどんな関係が？」

「ああ。実はな

その三人が三人とも、カザミドリに行つちまつたんだよ

「…………」

「いよいよそいつらの頭角が現れてきた、いよいよギルドの第一線に躍り出るつて時に、カザミドリに引き抜かれていつちまつた。：まあ、俺はこの通り大雑把な性格だからな。あいつらの人間性までは把握できなかつた。コントロールできなかつた。ただ、競争相手を凌駕する、虜げる、退ける術とその快感を教えただけで、それだけで終わつちまつた。言いにくいくが

イヴァリーも、そのうちの一人だ」

「な…………」

反射的に声が漏れる。

……イヴが、アンディさんの教え子？　そ、そんないや、思い当たる節はある。あいつは服装がどことなくアンディさんに似てたし、その口調や性格も……。第一印象の際、俺はあいつをアンディさんとダブらせてしまつたのも、否定しようのない事実だ。

あいつはアンディさんを師とした人間、だつたのか…………。

「…………だから俺は、カザミドリに戦力を与えちまつたみたいなもんだ。あいつらに殺された人間のうち数パーセントは、俺の責任でもある。だから俺はあいつらを止めなきやなんねえ。止める義務がある。なんとしても止めたい。だから

　　アンディさんは俺達の前で、深く、深く、深く、その頭を落として、

「頼む。俺に力を貸してくれ」

第十一話

俺は、レストランの入り口でアンディさんとギーンと別れた。そして街頭がぽつぽつ立つていてるだけで周りに誰もいない夜道、イヌの遠吠えしか聞こえない静寂の中を一人でトボトボと歩きながら、延々と考えを巡らしている。

さっきの食卓での会話では、俺はアンディさんに対して、分かりましたそれならそれで問題ないです、とでも言つようにも、さも余裕そうに取り繕つていた。しかし、内心ではいくらか動搖していた。動搖し続けていた。そして現在もその憂慮は続いている。即ち

俺が まともじやない ことに周囲が気付き始めている、ことについて。

……いや別に、ただのナイフ使いの十六歳の少年のままで、ギルドの仕事をまつとうできるなんて、そんなこと、ハナから思つてはいなかつた。期待してはいなかつた。俺だつてそこまで浅はかじやない。

実力を發揮すればするほど、ラキから教え込まれた技能が顔を出すことは目に見えている。

だから、疑われる程度はしじうがないと思っていた。諦めていた。それくらいならリカバリーは効く。隠しようがある。後々にも問題はないはずだ。これくらいは予定の範疇内。今さら慌てたりはしない。

しかし、これ以上確信を持たれるのはヤバい。
核心に近づかれるのは、ヤバい。

俺は今、顔を隠さずに動いてるんだ。アサシンとして顔が割れてしまつては、素顔ではおそれと行動できなくなつてしまつ。行動範囲が極端に制限されてしまう。例えば数年前に巻を賑わせた盗賊

であり、ロットのターゲットでもあるヒューミットなる賞金首は、手配書が全国に出回り、もはやどこぞの国王以上に顔が知れ渡っている。そのせいで、検問がある城下町には一切入れなくなつたと聞く。そんな状態じゃ、盗賊稼業とは言え、普通の手段じゃほとんど生活できないだろう。生きていくのもままならなくなる。

もちろん俺にはそこまで驚異的な業績を残す自信は欠片もないが、しかし似たような状況になつてしまつことは否めない。想像に難くない。そんなことになれば、俺の『生業』にも影響が出てしまう。そうなる前に手を打たなければならない。

つまり、そろそろだということだろうか？

そういう時期だということなのだろうか？

ラキは、「いい頃」と言つていた。太鼓判を押すとも言つた。つまり、今俺がそちらに行つたとしても、少なくとも向こう側からは問題ないということだろう。最低限の資格はあるということだろう。従兄弟であり、先輩であり、教育者でもあるラキから、俺はようやく認められたんだ。

それに、ルーも「ギルドやめよ!」と言つていた。ギルドの仕事が危険なことを実感したんだろうし、それに父親の消息が分かつた以上、あいつがこれ以上ギルド仕事を続ける意味もないのかもしれない。ルーが辞めるならば、実質俺達のチームは解散。俺をギルドに繋ぎとめるものは何もなくなる。もちろん、ルーが辞めようと言つてきた理由はそこじゃないのは分かつているが……。

元々俺がいつかギルドを辞めなければならなくなることは、分かっていたことだ。割り切つていたことだ。今更躊躇する理由はない。必要はない。

この『カザミドリ本部壊滅作戦』が、引き際としてちょうどいいのかもしない。

数分間に渡る内部葛藤の末、俺はついにそんな結論に達した

達したところで、ふと視線を上げると

目の前の街頭の下に、人影が映っていた。

それは白髪のショートヘア。俺より少しばかり低い身長で、ダボダボのパーカーを着た少女 ワイトだった。

まるで幽霊のように、暗闇の中に白い髪と肌が浮かんでいた。信心深い人ならば卒倒してもおかしくないような登場だ。その無表情も相まって、本物のような雰囲気を発している。しかし、過去に何度かこいつと夜道を歩いた事があつた俺は何とか氣絶せずに済み、ワイトの方に駆け寄りながら、

「ワ、ワイト？ どうしたんだ、こんなところで？」

「……あなたを……待つてた」

「俺を？ ……ってか、俺がアンディさんと夕飯を食いに行つた事は誰にも言つてないはずだが、一体誰に？」

「あなた達が……ギルドから出て行くところを見かけた。……ただ……この時期に……あなたが……アンディさんと食事に行くのは……何かしらの事情があると……思った……から……話が終わるまで……待つていた」

……待つてた？ ここで？ 僕がレストランに入つてから出るまでずっと？

話し込んでたせいで、俺は一時間ぐらいレストランの中にはいたはずだ。ってことは、こいつは一時間もここで待つてたってのか？ 夜風が肌寒いこんなところで。独りでずっと。確かに俺達は他言無用な話をしており、入つてこられても困つただろうが、しかしここまで気が利きまするというのもどうかといや、わざわざ待つてもらつたなら、なおさら早く本題に入るべきか。

俺は嘆息しつつ、

「……で、用件は何だ？」

ワイトは俺の心うちを読み取つとするように、まじまじと俺の

顔を見てきて、

「さつきギルドで……カザミドリ殲滅に……本格的に乗り出す旨を伝えられて……きた。……賞金稼ぎ総動員で……戦いを……挑むと。……そして……このタイミングで……アンディさんと……あなたが……会食したことから……あなたが何を言われたかは……明白。……あなたは重責を……担わされる。……つまり……作戦の本部隊に……組み込まれると……いうこと」

「へえ……鋭いじゃないか」

俺は感嘆しながら答えた。

……いや、感心してていいのか？　こいつにはれてるってことは、他の人間にも筒抜けつてことじゃないだろ？　それはちとマズくないか？　……いやまあ、それはないか。いくら俺とアンディさんがこのタイミングで会つてたからって、ろくに実績もない俺が作戦の重要な役割を任されるなんて想像もできないだろ。こいつはただ、俺の素性を知つてているからこそ　……そしてまた、アンディさんも俺について知つてている　……ことを知つてているからこそ　……そういう憶測がたつたに過ぎない。やはり、まだ問題は無いだろう。

俺は自分でそう結論付けつつ、再度ワイトの方を見ながら、「……まあ、お前になら言つても構わないだろ。そうだ。その通りだ。カザミドリ本隊への潜入部隊に加わるよう誘われたが、それがどうした？　何か問題あるのか？」

俺の質問に、ワイトは視線を落とした。そしていくらかの間をとつた後、ぽつりと、

「　行かないで……欲しい

そんな言葉を、声にする。

「……今日……左手に義手を……繋げて……もらつた。……繋げたばかりで……まだ……思つように……動かせ……ない。……馴染む

までには……時間が……かかる。……到底……その仕事には……加われ……ない。……カザミドリ殲滅作戦には……間に合わない。

「……いや、あなたを……サポート……できない」

「……いや、お前が俺のために動いてくれるのは嬉しいが、そこまで義務感を感じなくてもいいって。別に俺のピンチにお前が不在だつたとしても、そのせいで俺がお前を見限るなんてことは、絶対にな」

「違う。……そうじゃない。……それは関係ない」

ワイトはぶんぶんと首を振り、

「……カザミドリは……十数年間……国の圧力を退けて……犯罪に犯罪を……重ねてきた……集団。……あのイヴァーリーのような人間が……何人も……集まつた……結社。……あいつらは……人を人とも……思っていない。……仲間すら……簡単に……見限る。……数年間……あいつらを間近で見ていた私は……知つて……いる。……あんな奴らを相手にするのは……危なすぎる。……いくらあなたでも……危険……すぎる。……ロットのことは……ウェリイに……聞いた。……あなたには……ロットと同じ末路を……たどつて欲しく……ない。……だから……行かないで」

そう言って、ワイトは真っ直ぐに俺の顔を見据える。心なしか潤んでいいるようにも見えるその瞳で、じつと俺を見つめてくる。

行かないで、か。

何だか、戦争への召集命令を受け取った夫婦のよつな会話だが実際問題、似たような状況なのかもしれないがしかし決定的に違うのは、むしろ俺の本来の居場所が殺し合いの場である、ということ。俺はそういう道にいる両親から生まれ、そういう道にいる従兄弟に育てられてきたんだ。そこにいるのが自然で、当然なんだ。だから、どんな理由も理由として成り立たない。成り立ちはしない。

「……いや、まあ、気持ちはありがたいが……」

俺は頭をかきながら、

「ただ、やっぱり行くよ。アンディさんに直々にお願いされたんだし。それに、危険なミッションだからこそ、逆に周囲には物凄い人達がいるんだ。話じや、ランギング上位の人間が七、八人加わるらしい。だから、九十九パーセント生き残れないとか、そんな難しい仕事じゃないはずだ。相手が相手だから心配なのは分かるが、そこまで憂うほどじゃない。大丈夫だ」

「……そう」

ぎりぎり聞き取れるくらいの声で咳きながら、ワイトは視線を落とした。

「…………あなたの意思があるなら……私には……それ以上……言う言葉はない。懇願はできても……強制は……できない。

…………それは……あなたの自由。……仕方ない」

…………思いの外あっさりと引いたな。普通ならもう少し食い下がりそういうものだが。…………しかしあ、これがワイトのいいところでもある。

俺が納得してると、ワイトは言葉を続けて、

「…………私は強制できない。…………だからもう一つ…………お願ひ…………させて。…………できるだけ…………できるだけ危険な状況に…………陥らないで。…………生きるために最良の選択をして」

「あ、ああ。…………分かったよ」

俺の目の前、再度顔を上げて俺を見つめてくるワイトに、俺は気圧されるように答えた。切羽詰った表情。まるで俺がいなくなつたら生きられないとも言つひとつに……。

あなたを守る自由があつて幸せ

私を見限らないで

ふいにリフレインする、いつかのワイトのセリフ。

…………まさかこいつは、俺がギルドを辞めた後でも、俺に関わろうとするのだろうか。闇で動く俺に連れ立とうとするのだろうか。ボーダーラインを超えてくるだろうか。俺を追つて、こいつも闇の世界を

いや、それはないか。

きっとウーリイが止める。止めてくれる。

ワイトの居場所は、まだここだ。ギルドだ。まだここにはボーダーラインを超えていない。一ちら側の人間じゃない。いびつな過去があろうとも、町の裏路地に住んでもうと、まだまだ田の当たる場所で生活する権利を有している。

俺がこの街から消えても、きっとウーリイやギーン達と一緒に楽しく生きていける。暮らしていける。それがワイトのため。俺のため。お互いのため。みんなのためだ。

こいつに俺がさよならを言う時、一体どんな顔をするのか、簡単に想像できる。今のような無表情に寂しそうな雰囲気を混ぜ合わせた顔で、一度だけ懇願してくるだろう。行かないでと言つてくるだろう。そして…………それだけで終わるだろう。

それがワイトのいいところだ。

果たして、俺はいつもこれをこいつに伝えるべきか。カザミドリ殲滅作戦に加わる前？ 終わった後？ それとも街を出た後に手紙で知らせるか？ あるいは、何も言わずにおくか？ どのがお互いにとってベストだろうか？

そんなことを、ワイトを正面に据えたまま、棒立ちで考えていると、ふと……ふと、ワイトの顔が段々近づいてくるのに気が付いた。水面のようなその瞳が、俺の目の真正面に来て、さらに近づいて、近づいて、近づいてくる。

俺は動けない。動かない。

やがて俺の視界は、すべてがワイトの表情だけになつた。

「…………私の…………ためにも…………生きて…………いて…………」

そんな吐息のような咳きと共に、眼前で閉じられるワイトの瞳

その雪のような肌の色に反して、唇は温かかった。

「早川」

何やら高級そうな石の壁に挟まれた回廊。前後左右には俺達しかおらず、足音がやたら反響している中、俺達の先頭を走るムツナが、振り返りながら呼びかけてくる。

を追いかけながら、

『なあ、こいつで何てるのか? 倭連が田舎してるのは、金石』の保管庫だぞ? 倉庫だぞ? 倉庫って言つたら、普通、飾り気がないもんだろう。なのに、進めば進むほど壁の装飾品が増えてるじゃないか……。おい、本当に合つてるとののか?」

視線をそらすように、首を前へ向けながら答えるムツナ。

……いや、多分で

ここまで走ってきたのが無駄足だと、そんなオチは困るぞ。なんせ、今回俺はロットの剣『グレン』をわざわざ持ってきたんだ。それを背負つたまま走ってるんだ。これがやたらと重くて、もう余分な持久力なんか残ってない。来た道を戻るとか、そんなのは勘弁だ。……というか、ロットはよくもまあこんな重たいもんを担いで年がら年中走り回つてたもんだ。

俺は少しばかり息を切らしながら、

「おい。敵陣のど真ん中で迷子なんて、シャレにならないぞ。そんなの即ゲームオーバーだろ。潜入して三十分も走りっぱなしなんだ。もう、どこから来たかなんて覚えてねえよ。お前が持つてる見取り図だけが頼りなんだからな。頼むぞ？ 本当に大丈夫なのか？」

ふいに、前方のムツナではなく、俺の隣を走るギーンが答えてきた

た。

「壁や床の汚れ具合から見て、この辺りは人通りが少ないことが見て取れます。つまり、この先に入るのは限られた人間だけ重要なものがこの先に置いてあることは間違いないでしょう」

「そ、そう！　そうよ！　それを私も言いたかったの！」

振り返りながら、ひきつった笑顔で言つてくるムツナ。……ウソつけ。さつきまでやたらと地図を回転させるばかりで、廊下の様子なんて見る素振りもなかつたじやないか。

……しかしまあ、ギーンの保障がついたことで少しばかり安心した。やっぱりギーンは頼りになる。このままちゃんと『銀石』の保管庫にたどり着き、そこにある『石』を全部押収してしまえば、俺達の職務は完遂される。

カザミドリ本隊殲滅作戦。

これに組み込まれた俺達のミッションは、あくまで戦闘ではない。まあ当然だろ？　ここはカザミドリの本隊。中規模な組織でならトツプになれるような猛者が何人もいるんだ。そんな強者を相手に剣技に秀でたロツトならいざ知らず　俺達みたいな別段戦闘が得手でもない人間が真っ向勝負を命令されるわけもない。

その辺りは全部、現在ここに集結しているランキング上位の七名の賞金稼ぎが相手をしてくれる。

敵がそこに戦力を割いている最中に、俺達は隙をついて、敵の虎の子を確保すればいい。敵を避けて、逃げて、『銀石』の保管庫にたどり着ければいい。それだけが俺達の任務だ。

幸い、本職が情報屋であるムツナが手に入れた（裏ルートを経由して入手したそうだ。本作戦に加わっている上級賞金稼ぎの人の協力を得て、何とか確保したらしい）この建物の見取り図がある。それを頼りに保管庫へと向かえればいいだけだ。敵との遭遇にさえ気をつけていれば、それ以外に問題はない。

カザミドリの本陣に突入ということで、一体どうなることかと思

つていたが、思ったよりもすんなり進みそうだ。現在の俺は緊張もしていないし、不安も抱えていない。むしろ気が抜けてるくらいだ。それというのも、今回のメンバーが見知ったというか見飽きたメンツばかりで

「 おっと。分かれ道ですよ。どうします、ムツナさん？」

「ええと、ここは右ね」

ギーンからの呼びかけに、ムツナは画面を見下ろしながら答えた。そして、その丁字路を曲がった瞬間

「 こっから先は行かせねえ！」

叫び声と共に、逆立つた髪と釣り上がった目をした男が正面に現れた。

タイミングを合わせていたように、振りかざしていた斧を先頭のムツナに向かつて勢いよく振り下ろしてくる。

俺は急停止しつつ、反射的に腰元のナイフに手をかけたが、それを取り出す前に、

「とりやあつ」

「邪魔です！」

そんな声が俺のすぐ後方から響き、ついで青い弾丸と黄色い電光が釣り目の男に向かつていく。

斧が振り下ろされる前に、後方へ数メートル吹き飛ばされる大男。床に衝突して、それ以上動かなくなつた。右半身は氷付け。左半身からは黒い煙が昇つている。

俺がちらりと振り返ると、青い銃を構えたルーと、黄色いロッドを握ったウェリイ。双方とも鼻息を荒くして、その気絶男を見下ろしている。

ルーは黒目だけを左側に動かしながら、

「ふん。余計なことしないでよ、スペゲッティ。あたし一人でもどうにでもなるんだから。むしろ邪魔よ。家で引きこもつてれば

いいのに

「あーら、何をおっしゃいますやら。わたくしにはロット様の仇を討つという使命があるのでですから。引きこもったりはいたしません。必ずやここで、敵将の首を討ち取つて差し上げるのです。……そちらこそ、ギルドを辞めるんじゃなかつたのですか？」

「ま、まだ辞めないよ！ ロットのためにも、カザミドリは絶対潰してやるんだから！ それに、保護者として、ダルクをこれ以上危険なところに単独で行かせられないもん」

……いつからお前は俺の保護者になつたんだ。

こんなシリアルスな仕事にこのメンバーは場違いな気がしないでもないが、しかしあま、なつてしまつたものはしようがない。成り行きといふか、なし崩し的に、この五人が集まつてしまつたのである。

俺とギーンは、アンディさんの推薦。

ムツナは、元々つてがあり見取り図入手の時にも世話になつたと

いう上級賞金稼ぎ、ヒマリさんの推薦。

そしてルーとウェリィは、組むなら見知つた人間の方がいいと言ふムツナの推薦である。

時と場所が変わつても、顔ぶれも会話も雰囲気も変わらないメンバーだ。いまいち いや、正直に言えば、まったくもつて 倭は緊張感が保てない。保てていない。

「どうか、いい加減スペゲッティなる呼称はやめてください。この絹のような髪を食べ物に例えるなんて言語道断ですわ。まったく、食い意地が張りっぱなしですねえ、カツパは」

「そ、そつちこそカツパカツパ言うのやめなさいよ！ あ、あたし知つてるんだからね！ カツパが頭にお皿が乗つてる変な生き物だつて！ ちゃんとダルクに教わつたんだから！ そんなの、あたしに全然似てないもん！」

「うふふふ。ぴつたりじゃないですか。食い意地が張つてるから、頭からお皿が取れなくなつてしまつたんでしょう？」

「違うもん！ 何よ！ そつちこそ、ちぢれたラーメンみたいな頭

のぐせに！」

「ち、ちぢれたラーメンッ？　スパゲッティの次はラーメンとは！
訂正なさい！　この、言うに事欠いて　」

「……はあ」

俺は一人の相変わらずのやり取りを眺め、嘆息した。

……まあいい。理由はどうあれ、とにかく二人とも本調子を取り戻してくれたみたいだし。気を揉む要素が一つ減つてくれたと考えれば、いくらか救われる。

「　とにかく、先に進むぞ」

四人に呼びかけるように言いつつ、俺は再度走り出した。

そして回廊をさらに五分ほど走った後、目の前に扉が現れた。

爆弾でもこじ開けられそうにないくらい、分厚く重そうな鉄の扉。幅も高さも十メートルくらいあるだろう。そしてその表面には鳥やら馬やらが彫られていて、周囲の壁以上に豪奢な造りになっている。俺はその扉を見上げながら、

「これが倉庫の扉か？　つうか、こんな扉開くのか？」

「……押してみましょう」

俺の横、ギーンが早速ドアを両手で押し開き始めた。すると

すうっと、意外にもすんなりと扉は開かれた。

そのできた隙間から、中へと歩を進めていく俺達五人。

その扉の向こうにあつたのは、『銀石』でも『白石』でも『黒石』

でもなく　　人、人、人、人、人。

各々武器を構えた人間ばかりだった。

扉から入ってきた俺達を囮のように　まるで待ち構えていたかのように　概算で六十人くらいの人間が、半円状に隊形を組んでいる。全員が全員、にやにやと、いやらしい笑いを浮かべている。

これは、罠！

思わず後方へ下がる。したが、バタンと、扉は閉まった。
「ちよつ、待つて！」

慌ててウェリイが扉を開けようとする が、動かない 閉扉はもはやただの壁になり 倘達は完全に退路を絶たれた。
絶対的な袋のネズミの状態。滲み溢れる危機感。圧迫感。焦燥感。絶望感。

……どうする？ どうする？ どうすればいい？

混乱する頭を無理矢理回転させながら、ふと前方を見ると、一人だけ椅子に座り、周囲の人間とは明らかに異質なまがまがしい空気をまとった男が目に入った。

黒いくせつ毛。頬に大きな傷。黒いあごひげ。黒いマント。紺色のヤシャツ、ズボン。腰元には黒い剣の鞘。

そんな男が、倘達の真正面で倘達に相対している。ニカリと笑っている。

俺とこの男は初対面。

しかし 俺はこの男を知っている。

ギルドの掲示板にいつも張り出されている顔。俺が登録する前から そしていまだにずっと WANTED の文字と共に示されている男。この男こそが 盗賊として世界に名をとどろかせ、国王以上に顔を知られた、ロットの両親の仇でもある

ヒュー＝ミッド＝シラン

……そうだ。そんな噂も流れていた。そうか、やっぱり本当に
「 ヒュー＝ミッド、貴様がカザミドリのトップだったのか……」
「 むははははははー！ そうだ。その通りだ、若造」
ヒュー＝ミッドはあごひげを揺らしながら、愉快そうに笑った。

「さうか、我の顔はこんなガキにまで知られているのか。有名人といつのも困ったものだな……。むははは。だが、喜べ、若造！それを知ったのは、我がカザミドリ内部の人間以外ではお前らが最初だ！ 光栄に思うがいい、哀れな捕虜共よ！ むははははははははは！」

捕虜。

…… どうか。こいつらの狙いはそれか。ランギング上位の賞金稼ぎを迎撃する前に、俺達をとつ捕まえて人質にするつもりだったのか。偽の見取り図を流しておけば誘導することも可能だろうし。…… どうしてこいつらは俺達がここに来ると読めたんだ？…… いや、そんなことを考えるのは後だ。ここで俺達が捕まつては、アンディさん達に迷惑がかかる。作戦に支障が出る。どうにかしてこの危機を脱しないと。

俺は何か作戦を練ろうと、後ろの四人を振り返ろうとしたが、その中で、ムツナがいきなり前方へと歩き出してきた。俺の横を通り過ぎ、さらに前へと進んで行く。

スタスタと、物怖じすることもなく歩を進める。まるでここが自分の庭であるかのように歩いていく。そしてヒューミッドの正面までたどり着いたムツナは、青紫のセミロングの髪を振りながら、くるりと俺達の方を振り返った。その顔には、ホストファミリーが来客を歓迎するがごとき微笑。そして一言

「 うふふ。よつじや、みなさん。カザミドリ本部、不死鳥の間へ」

「ちょ……ちよっと、ムツナ。……ど、どうごうじですか、……」
そのムツナの予想外の行動に、ウエリイが口をぱくぱくさせながら疑問を口にする。

「……あなた、な、何でそちら側に行くんです？　そんな、それじゃ、まるで」

「うふふ。そうよ、ウエリイさん。スペイつて呼び方は安っぽくてあんまり気に入らないし、できれば内通者とだけ呼んで欲しいんだけど。……うふふ。そのなのよ。私はね、実はカザミドリの人間

カザミドリ五番隊の副隊長なの

ムツナはしたり顔で言つてくる。

その発言と同時に、ウエリイが膝からぺたんと崩れ落ちた。肩を落とし、田の焦点が宙を舞つている。

その傍らに立つてゐるギーンが、

「……ということは、僕達がここにたどり着いたのも、道に迷つたからではなく、あなたが誘導したから、ということですか？」

「うふふ。もちろんそうよ。私自身もこの建物に入るの初めてだったし、おまけに広いからね。危うく迷いそうになつたけど、予定通り、ちゃんとここにたどり着けたわ」

睨みつけながら言つぎーんに、ムツナは依然笑顔のままで返していく。

「……僕がその図面を見せてもらつた時は、確かにこの辺りはちゃんと研究施設になつてたはず。つまり、その図面からしてフェイクだつたと、そういうわけですか。……ということは、あなたにその見取り図を渡したヒマリさんも俄然怪しいですね。彼もカザミドリの人間だつたと……。ふん、さらに言うなら、口口ノ山の調査員の搜

査の仕事の際、イヴァアリーにあの場所を教えたのはあなた。そして、以前あなたが僕にチームを組もうと言つてきましたのも、つまりは僕をカザミドリに誘う布石の一つだったのですか

「うふふふ。さすがギーン君。冷静ね。よくもまあ、こんな状況で的確に推察できるものだわ。やっぱり私が見込んだ通りよ」

「……あなたに褒められても嬉しくありません」

ムツナの賛辞に、ギーンは慄然と答える。

ふと、ギーンが俺の隣にそろりと近づいてきて、

「……これは相手の人数が多くます。四人で全員を相手にするのは無理でしょう。ですから、一点突破を狙つてそこから逃げるのが最も生存確率が高いと思われます。逆に向こうの人数が多いことを逆手にとるんです。我々が固まつていれば、我々に攻撃できる人間は限られてくる。そして攻撃したくてもできない人間でこの場が混乱してくる。そこをうまくつけば、あるいは」

「むはははは！ 心配には及ばん！ ここにいる奴らはただの壁だ。貴様らが逃げないための、な。貴様らの相手には、それなりの奴をちゃんと用意してやつた。感謝しろ」

イスにふんぞり返りながら高笑いするヒューミッド。ひとしきり笑い終えたところでパチンと指を鳴らすと、人だかりの中から三つの人影が現れた。

そのうちの二人は、俺は知らない。見たこともない ただ、その体格、眼光から只者ではないことだけは分かる。ヒューミッドほどではないにしても、それだけの雰囲気を持つた奴だった。

しかし、問題はそれ以外のもう一人。

そいつは、俺達とほとんど変わらないような身長。黒いニット帽から紫色の髪を覗かせ、Tシャツにハーフパンツ、サンダルを履き、首からチエーンを提げた しかし、ケガが完治していないように、腕や足や顔の六割が包帯巻きになっている 少年。その見覚えのある服装は、まごうことなき

「……イヴァアリイイイーッ！」

そんな叫び声と共に、俺の横、ウエリィがロッドを握り締め前へ駆け出そうとする。

俺は慌てて腕を伸ばし、それを制して、

「おい！ 待て、ウエリィ！」

「うるさい！ どきなさい！ あいつは、あいつだけは」

「だから待てって！ 無闇に行くな！」

「待てません！ あいつはロット様の仇」

「下手に突っ込んだら、向こうの思う壺だ！ 危険なだけだ！ 死ぬだけだ！」

俺の声を荒げた説得に、ウエリィはぎりっと唇を噛んだ。そして

ふつと、俺の背中の『グレン』を眺め、

「……そうでしたわね。自分では勝てないからと、あなたに敵討ちを頼んだのはわたくしでしたね。…………取り乱しました。すいません」

ようやくウエリィは平静を取り戻し、一步下がった。

俺は安堵で嘆息しつつ、顔を上げ再度ムツナの方を見る。

ムツナは含み笑いで、

「うふふ。別に突っ込んで来ようが来まいが、結果は同じなのに。……で、どうするの？ そちらにはもう打つ手はないでしょう？ おとなしくしてるなら、それなりに扱つてあげないこともないけど？」

「バカ言つな」

俺は答えながら、背中から大剣『グレン』を降ろした。

「……つたく、こりゃもう、重り以外の何物でもないな。ここまで運ぶのにどれだけ苦労したか……」

「……？ それを降ろして、どうする気？ まさかそれを使つてあなたが戦うの？ それとも、戦うのに邪魔だとか？」

「……こつするんだ、よ！」

言いながら、俺は『グレン』を前方に放り投げた。

クルクルと回転しながら、宙で放物線を描く大剣。

その行動の意味が分からぬのだろう、ムツナも、ヒューミッドも、それ以外のカザミドリの人間も、そしてウェリィとルーも、皆が皆ポカンとその軌道を眺めている。

その着地点であるう位置にいるのは、黒いニット帽と紫の髪の男。そいつは おもむろにニット帽を脱ぎ、その下の紫色のウイッグも外し、首にかかつたチエーンも投げ捨て、顔を覆っていた包帯も捨て去つた。その下から現れたのは

赤い短髪と、やたらに尊大な笑い顔！

その様変わりに驚く周囲の人間の中、そいつは『グレン』の柄をぱしりと握ると、そのまま鞘から抜き去つた。

そしてその両隣で呆然としたままの二人のカザミドリ幹部を、各々一太刀ずつで切り伏せる。

そしてそしてそして、停止する間もなくそいつは『グレン』を振りかぶり、一連の流れで、

「 火炎斬鉄 ！」

叫びながら『グレン』に炎を灯し、椅子の上のヒューミッドに向かつてその斬撃を放つた。

反射的にヒューミッドは腰から剣を引き抜き、その攻撃を受け止める

が、
「ぐつ……」

勢いを殺しきれず、そのまま後ろへ弾き飛ばされた。

木製の棚に激突し、粉塵が舞う中、ヒューミッドはよろよろと立ち上がりながら、

「な、なんだ、貴様は？　お前はイヴァリー＝シャルでは……？」しかし、赤髪のそいつは相変わらずの尊大な笑顔のまま、メラメラと燃え盛る『グレン』の剣先をヒューミッドに向けて、

「あつはははははは！　我こそはアステルの赤き勇者、ロタード

= レイムー ジリで会つたが十年田一 覚悟せい！ 我が宿敵、ヒ
ルーニング

「たあー！」

振り下ろされるロットの『グレン』。

ガキンッ

額の上、ヒューミッドがそれを受け止める。赤と黒の刃が交錯。ぐぐぐ、という競り合いの後 カキンッ 双方剣を振り抜き、後方へ跳んだ。

ロットとヒューミッド、お互い距離をとり、睨み合しながら、

「……貴様、イヴァリーに成りすまして潜入しておったのか！」

「わははは。当然だ。私の潜入スキルを持つてすれば、造作もないことだ」

……いや別に、この潜入が成功した要因はそこじゃないだろうに。この展開に水を差すのもアレなので、いちいちつっこみはしないが。

「……おのれー！ なめおつて、この若造が！ 我が直々にあの世へ送つてやる！」

霸氣のこもつた叫び声と共に、ヒューミッドが前へと駆けでる。目で追うのがやつとのスピード。黒い剣を上段へ振り上げ、そして直下へと振りきつた。

風を切る剣の残像。

ロットは反射的に右へと跳ぶ。わずか数センチの余裕。ギリギリのタイミングだ。赤い髪と服の切れ端が持つていかれている。

数メートル離れた位置にすたんと着地し、片膝をついたロットは、ニビルに笑いながら、

「……ふん！ 一千万の賞金も伊達ではないようだが
し、まだまだだ！」

炎が揺らめく『グレン』を下段左に構えるロット。そのまま一步踏み出し、

「火炎斬空！」

ロットの周囲に赤い剣筋が描かれる。

同時に、巻き起こる熱風。

数十メートル離れている俺のところまで届く風圧。俺は思わず腕で顔をかばった。

が、剣風の真正面にいたヒュー／＼シードにはそれが直撃。

「ぐつ

ドゴンッ

そのまま吹き飛ばされ、隣室へ続く扉へ激突。そのままその中へ消えていった。

ロットはさらに床を蹴って、

「一気に決着をつけてやる！」

と、ヒュー／＼シードを追つて扉をくぐり、隣の部屋へと走り去っていた。

俺もそれを追つて加勢してやろうかとも思ったが、やめた。ここにも敵襲がいるし、それに 王道は王道同士、正統的主人公は正統的黒幕と雌雄を決するのが筋だろ？ 俺の出る幕じやない。まだ状況に思考がついていない人間の中、俺は胸ポケットからトランシーバーを取り出し、

「もしもし、アンディさん、こちらダルクですが」

『おう、アンディだ。どうした？ 倉庫に着いたか？』

「いえ。どころか、敵陣のど真ん中に着いてしまいました。六十人強の敵襲に囮まれて、ロットがカザミドリのトップ、ヒュー／＼シードと交戦中です」

『そうか。……ちゅうが、やつぱヒュー／＼シードがカザミドリの大将だったわけか』

「はい。やはり、ムツナがカザミドリの内通者でしたよ。見取り図にヒュイクが混じっていました。……そつちのヒマツさんも、ビッグやらカザミドリの人間だったらしいです」

『そうか。さつきから姿が見えないんで、そりじゃないかとは思つてたが。……了解だ。俺達もすぐそつちへ行く。それまであんま

深追いするなよ

「分かりました」

そう答えて、俺はトランシーバーを切った。

胸ポケットにしまいながら、ふと目線を上げると、

「……ど、どうしたことなのよ……？」

「やうやく、ムツナが口を開けた。

「どうこうこと？……な、何でイヴがロット君なの？……とうか、何でロット君が生きてるのよ？　口ロッ山で死んだはずですよ？」

「……お前はさっき何を見てたんだ。あの通り、ピンポンしてたじやないか。やかましいくらいにな」

「だつて、そんな、おかしいじゃない。あの丘でロット君の死体を見たし、あれは『橙石』の幻覚でもなかつたし……。じや、じやあ、一体あれは何だつたのよ？」

「そんなん、明白だらう」

俺は肩を持ち上げながら、

「俺もお前もルーもギーンもアンティさんも、そしてロットも生きていた。とすると、あの首切り死体は　イヴに決まってるじやないか」

「な……！」

ムツナは　そしてルーとウーリイも　田を見開く。ギーンだけは口元を歪める程度だが。

「そ、そんな……いや、確かに、装備品さえ付け替えれば、あの状況は作れるけど……でも、それじゃあ、ロット君が一人であんな偽装をしたっていうの？　そ、そんな、何で」

「……別に、協力者がいてもおかしくはないだらう」
「そ、そんな、ありえないじゃない！　だつて、ロット君とイヴが戦つたのは嵐が吹き荒れてる間。その時、その二人以外はみんなロッジの中にいたわ。誰も協力できるわけないじゃない」
「……ふん、面白いほどキレイに騙されてくれてるな。……」　ロッ

トトイヴが戦つてたのは嵐が吹き荒れてる間だけ つていうのは、何か根拠はあるのか？」

「へ？ ……だって、そんな、当たり前じゃない。死体が丘の上にあつて、つり橋が吹き飛ばされてたんだから。つり橋が切れたのは、嵐のせいだ つて、あ……」

「……ふん、ようやく気づいたか

思い至つたように口を丸く開けたムツナに、俺は嘆息しながら言う。

「確かにロープはちぎれてたが、それは強風のせいとは限らない。人為的に引きちぎった可能性 だってあるだろ？」

「で、でも、それじゃあ、一体いつ……」

「覚えてないか？ あつただろ？ 僕達がロツジを飛び出してから、あの丘に全員が集まるまでの三十分間。その間に発見し、作戦を取り決め、再度分散するのは不可能じゃない」

「そ、それはそうだけど……」

まだ納得がいっていないような表情で、ムツナは呟いた。

「でも、わけがわからぬ。あの時、あの時点で、な、何であなたたちがそんなことをするのよ？ 意味がわからないじゃない」

「『何で』だつて？ 決まってるだろ。ロツトにカザミドリ潜入をさせるため。潜入の成功率を上げるために そう、お前をだまくらかすため さ」

……そう。あの時から、俺は ムツナが内通者である可能性 も考えていたんだ。

その根拠、といふか足がかりはいくつかあった。

一つは、ムツナがギーン一人と ウエリイ達と離れて チームを組もうと提案してきたこと。別にギーンと組みたいだけならば、四人のチームを組んでも問題はないはずだ。むしろ四人組の方が戦力が期待できる。なぜギーン一人と組みたがるのか、その真意がいまいちよく分からなかつた。

しかし、俺は聞いていた

カザミドリは、将来有望な人

間に正体を隠して近づき、勧誘していくこと

つまりムツナは、ギーンをカザミドリに勧誘するためにチームを組もうと言つてきたんじゃないのか。そう考えればすつきりする。以前勧誘をつっぱねたウェリイと、カザミドリの試験体であつたワイトが邪魔になるのは明白だ。だから、ムツナはウェリイとワイトを度外視したんだ。

そしてもう一つ、俺がムツナを疑つた根拠は、ウェリイに喫茶店に呼び出された際、イヴとムツナの情報のやりとりが思いの外迅速だつたことだ。

元々、イヴは闇で動く人間。本人曰く、顔と名前が一致しているのは、カザミドリでも二、三人しかいないような人種なのだ。そんな人間と頻繁に連絡が取れるムツナは、一体何者なんだろう？ そこまでコネクションが太いなら、カザミドリ討伐への足がかりに使われそうなもんだろうに。それでもイヴとのコネクションが継続できる理由は何なのか？ 俺はそんな疑問を持ったのだった。

そして最後、三つ目の根拠は、イヴがコロノ山に侵入してきたことだ。

あの時、俺達はアステルで集合しコロノ山に向かつたわけだが、あの仕事は一両日で決定されたものだ。部外者がその細部を調べるには時間が不十分だつただろう。しかも、移動にはアンディさんが帯同していた。そんな中、俺達の追跡がそう簡単に成功するとも思えない。つまり俺達の中に、仕事の場所、メンバーをリークしている人間がいるんじゃないかと、俺は疑つた。というか、この疑問が、俺の中での「ムツナはカザミドリの人間」という仮説の発端だつたわけだが。

しかし、俺はそれほど確信があつたわけじゃない。
そこまでシリアスに考えてたわけじゃない。

あくまで可能性の一つ。

例えば「死後の世界は、科学的根拠はないが、存在する可能性だつてある」というテーマと同じような、一つの仮定にすぎない。一

生懸命疑つてたわけじゃない。

ただ、俺はこの仮説をアンディさんに話してしまったのだ。

そしてアンディさんが、予想外にも同調してきたのだ。

アンディさんが、ムツナを逆に欺く作戦を提案してきたのだ。

あの「ロノ山」の台地で、イヴの死体を前に、アンディさんが俺とロットに言つてきた。

『これ を知った時、あいつら 特にルーとウエリイ がどういう反応するかは、大体予想がつく。多分、見てる方も苦しくなるようなことになるだろう。……ただ、お前らだけは降りないでくれ。カザミドリを討つために、お前らだけは戦い続けてくれ。頼むつ。この通りだつ』

そう言つてアンディさんは、子供でしかない、新米でしかない、自分の半分程度しか生きていらない、人生経験すらまならない俺達に、深々と頭を下してきた。世界に名だたる賞金稼ぎが、俺とロットに懇願してきたんだ。

そこまでされたら、俺は、俺は のるしかないだろ？。

正直なところ、俺自身としてはついつきまで、ムツナのことは八割方信じていた。カザミドリの人間ではないと思つていた。そもそも、証拠は何もなかつたんだから。

だが、アンディさんの熱意に負けて それに、目上の人命令を無下にできるわけもなく 俺もこの作戦にのつたのである。

結果として、これで大正解だったわけだが。

「……イヴと深い繋がりがある人間が、カザミドリの中でも極めて少ないことは、あいつの口から聞いていた。だから、別口から手に入れた情報と、変装 あまりしゃべれないような状況を作るような変装 をすれば、潜入自体は不可能じゃなかつた。だが、その成功率を上げるため、お前を騙し お前に、イヴが生きていると証言させることで 疑われないようにしたわけだ」

「そ……そんな……うわ。……だ、だつて、ルーちゃんもウエリィ

さんも、本氣で驚いて、泣いてたじや……」

「そりや、そうだ。二人にも言つてなかつたんだから

……いや、一人には悪いことをしたと思つてゐる。あんなに悲しませ、傷つけてしまつたんだから。

しかし、アンディさんが断固として譲らなかつたのだ。他のメンバーにはこの眞実を教えないことにはあつた というか、俺は最初からそのつもりだつた が、アステルに帰つてからも、ムツナが一人につきつくりになるよくなつたのだ。強引に。看病と称して。

そしてあらうこととか、ヒマリなる上級賞金稼ぎのコネを使ってムツナがこの作戦でまで俺達に關つてきたため、今の今まで 作戦の真意を果たすこの瞬間まで 他のメンバ―には言えずじまいだつたのである。……もっとも、ギーンだけはそれとなく気付いていたようだが。

ちらりと首を後ろに向けると、ギーンは平然と立つてゐる。

その顔には驚きは欠片も浮かんでなく、相変わらずのこましゃくれた微笑が浮かんでゐる。……まったく、末恐ろしい奴だ。どこまで見透かしてゐのか。おかげで こいつが端々で俺のことをおもんぱかつてくれていたおかげで 僕としても動きやすかつたのも事実だが。

「じゃ、じゃあ……私達は、あなた達の手の上で踊つていたと……

そういうこと、なの？」

「まあ、そんなとこだ」

脱力しながら言つたムツナに、俺は何ともなしにこたえる。……厳

密に言つなり、アンティさんの手の上だがね。俺自身は、こいつがヒューミッシュの方へすたすたと歩き始めるまでは、確信は持つていなかつたんだ。

「……い、いや、それにしても、おかしいわ。だつて、丘の上のイヴの死体には外傷は何もなかつた。そして首は、『黒石』の刃で切られてた。いくらなんでもこれはおかしいわよ。これじゃ、ロット君は外傷を与えることなくイヴから『フーム』を奪い去り、その刃で一撃でイヴの首を切つたつてことになるじゃない。私達がロッジにいる最中に、一人の決闘は始まつてたんだし…………。そこまであの二人に実力差があるなんて、そんなわけ……」

「……じゃあ、『黒石』の武器が他にあればいいだろ?」
「そ、そんなわけないじゃない。『黒石』は私達がほとんど独占してるわ。強いて言うなら『闇蛇』あたりが持つてるけど。でも、あいつは最近なりを潜めているし、この件に関わつてくるなんて考えられない。他に、他に『黒石』の武器なんて」

と言つたところで、はつと、ムツナが息を漏らした。

まるで初めて地動説を聞かされた数年前の人間のようだ、驚愕の表情を浮かべ、

「ま、まさか

震える声で呟くムツナ。そしてわなわなど、俺を見上げてくる。

……正直、俺はこの時点まで迷つていた。

これ を言わなくてもいいんじゃないか？ 明らかにする必要もないんじゃないのか？ このまま、今まで、もう少し生きていけるんじゃないのか？ ギルドの仕事を続けられるんじゃないのか？ そういう方法もあるんじゃないのか？ そう思つた。思つていた。

しかし、すぐに思い直す。

このことはすでにロットには教えてある。恐らくギーンも感づいているだろう。そしてここまでは話してしまつた以上、ルートウーリイにも話すことになる。あるいは、この作戦に参加している他の賞金稼ぎにも伝わるだろうし、カザミドリの人間が一人でも逃げお

おせてしまえば、そいつから世間に漏れてしまうことも否めない。

もつ、隠し切れない。

後戻りはできない。

そうだ、最初から分かってたことだ。
最初から割り切っていたことだ。

いまさら躊躇して何になる。

これが俺の本当の道なんだ。

ふう、と、俺は諦めのような覚悟のような息を吐いた。
そして背中のナイフホルダーから『黒石』のナイフ『ゼロ』を取り出し、それを顔の前に持ってきて 初めて自分の口から、二つの一つ名を口にする

「まあ、つまり、俺がその『闇鳥』ってことだ」

俺がそれを口にした瞬間 肩を震わせるムツナ。

あんぐりと、口を開けるルー。

瞳孔を見開くウエリィ。

そして、静まり返る他のカザミドリの人間。

……そう。つまりは、そういうことだったんだ。イヴの息の根を止めたのは、俺なんだ。『イヴの方が能力が上』みたいな言い方をしてはいたが、しかしそれは 賞金稼ぎとして。『黒石』を扱う敵に真っ向勝負で勝つのは難しい。つばぜり合ひすら叶わないんだから。

しかし、こちらも『黒石』を扱えるなら別問題。

そんなディスアドバンテージはなくなる。

恐らくラキとアンディさんはほとんど能力的に拮抗しており、それだから学んだ俺とイヴには、当初はそれほど差はなかつただろうが 向こうは数年前から鍛錬を止めている。しかし、俺はついこの前までしごかれてきた。その差は歴然。

同じ立場に立てば、あいつを一太刀で斬ることは難しくない。

『黒石』相手に攻めあぐねていたロットには困難でも、俺なら可能。俺なら容易。

逆に俺にしかできない。そういうことなんだ。そういう証拠にもなるんだ そういうことを、俺は今、証言してしまったんだ。

俺はもう、後戻りはできない。

ここにはいられなくなる。

すべてと別れ、縁を切り、身を隠して闇の中を生きていく、これが号砲。

これが予定通り。

これが既定路線。

これが規定路線。

しかしまあ、最後の賞金稼ぎとしての仕事は、きっちり済ませよう。

俺は一步、ムツナの方へ足を踏み出した。

その足音にびくついたムツナは、慌てて口を開け、「な、何やつてるの！ ゼ、全員で『闇鳥』を討ちなさい！」

周囲に向かって叫ぶ。

呼びかけられた六十人は、意識を取り戻すのに一拍を要した後、「う、ウオオオオオオオー！」

怒号を鳴らして、各々武器を手に俺の方へと襲いかかってくる。前方と右と左から、合計六十人が、敵意と殺意をまとめて向かってくる。

その六十個の刃が俺に近づいてくる。

俺を殺そうと歯向かってくる。

俺は、はあ、と一つ嘆息した。

そして、思慮なく、考慮なく、躊躇なく、遠慮なく、俺は右手に

握った『ゼロ』でもつて

斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて

斬
つ
た。

飛び散る飛沫も、悲鳴も、倒れ伏すものも意に介せず、俺は『ゼロ』を振り続けた。

そしてたがだが数分の後

中止する、掩人謀略によるもの以外、

は動くモノは何もなくなつた。

少しはかり俺の息は荒くなっているかそこまでの労力は惜しい
いない。ここまで『グレン』を運んでくる方が、いくらか大変だつ

六

ふと、視線を後ろに向けると、それに呼応してルーとウエリイがびくりと肩を震わせる。俺は、額から鮮血が滴つているのに気付いた。ぬめりと、俺は手の平でそれう拭う。このせいで一人は驚いたのか　もしくは、それだけじゃないのか、分からないうが。

「うむ、だれかの手で、思つていた。

これが後悔はない。

俺は再びムツナの方へと視線を動かした。

俺は再びムツナの方へと視線を動かした。

ツナは、

「……くつ

立ち上がり、後方へと走り出す。そして部屋を出でてしまつた。

俺は、背中越しに、

「……あとのことは、ギーン、頼む」

「はい。……分かりました」

期待通りのギーンの返事。あくまで冷静なその聲音は、とてもありがたかった。

俺は赤く染まつたままの『ゼロ』を握りなおすとそのまま、ムツナを追つて部屋を出た。

第十五話（前書き）

「ハストと云ひます。すいません……。

ムツナを追つて不死鳥の間の奥の扉を出ると、その後はほぼ一本道だった。

左右にいくつかドアが並んでいたが、そこには開閉した雰囲気はない。そこにムツナが逃げ込んだとも思えない。隠れているとも思えない。ムツナはこの通路の先へ行つたんだろうと直感的に思い、俺は真っ直ぐに廊下を走つていった。

そして数分走つた後、一つの部屋に突き当たつた。

さつきの広間の五分の二くらいの広さ。さすがに六十人が入り乱れるには狭すぎるが、それでも十分広い。十数人くらいならこの中で何かしらの作業ができるようなものだ。

そして壁際には机が並んでおり、その上にはビーカーやフラスコ、その他何かの計測器のようなものが無造作に並べられている。ところどころ白や黒の色がついた固体も落ちていて、それらは恐らく『石』の類だろう。

ここは『銀石』の研究所？

そんな確信に限りなく近い疑惑を抱えながら部屋を見回していると、奥にぽつと現れた人影　　口元を歪めて笑つているムツナだつた。

「……うふふ。やつぱり来たわね」

「当たり前だ。お前もカザミドリの幹部の一人。逃がすわけにはいかないさ。……さあ、そろそろ観念しな。そのうちアンディさんもここへ来る。お前にはもう、抗う術はない」

「ふふ。子供ばかりのところで動いてただけあつて、やはりあんた達はまだまだ甘いわね。甘すぎよ」

「何がだ」と俺が言おうとした瞬間、ムツナは右の壁に向かつて赤い石を投げつけた。

ガコン　　とその石が壁にぶつかつた瞬間、炎が巻き起こる。

「お、おい！ 何するんだ！」

「うつふふ。別に？ 見ての通りよ」

「見ての通りって、お前」

問答しているうちに石の炎は机上の紙に引火し、机に引火し、そしてビーカーを赤く包んだ

その瞬間、

ドゴォンッ

「うわー！」

爆発。机が吹っ飛ぶ。顔に降りかかる爆風を俺は思わず腕で遮った。この威力、まるで爆弾

いや、それ以上だ。これはまさか

「ぎ、『銀石』か！」

「うふふ。」名答

赤々と燃える机を笑顔で眺めながら、ムツナは平然と答える。

「」の部屋は、お察しの通り『銀石』の研究所。そこら辺の容器には、生成途中、あるいは生成したばかりの『銀石』が入ってる。だから、その容器に熱を『えれば当然』『銀石』が発動するわ

「ぎ、『銀石』を発動？ そんなことして、お前、一体

「『何をするつもりなんだ』？ うふふ。決まってるじゃない。この基地をすべて消すのよ」

基地を……消す？

「ええ。ここにある『銀石』だけでも、この周囲数百メートルを消し去るには十分だろうし、地下に保管されてるやつも連鎖的に反応すれば、全部あとかたもなく消えるでしょう。……」のままじゃあ、この基地が賞金稼ぎに潰されるのも時間の問題だし。それに辛うじて生き延びたとしても、ロット君に色んな情報をリークされた後じや、どのみちカザミドリは長くないわ。だったら、ここが引き際としてちょいづいいじやない

「ちょ、ちょいづいいじやない？」

って、お前、いいのかよ？ こ

れじゃあ、お前も　　「

「私？　ふふ。私は別に構わないわよ

あなたが死んでくれるなら、ね

言いながら、ムツナは瞳を鋭く光らせて、俺をじっと睨みつけてくる。まるで、俺に対して恨み　　あるいはそれ以上の感情を抱いているような表情だ。

……いや、しかし、俺がムツナと初めて会ったのはたかだか数週間前だ。その後だつてそこまで頻繁に会つたわけでもない。会話したのだけ、この前の口ロノ山の時ぐらいで、それ以外はほとんどしていない。そんな関係で、俺がここまで忌み嫌われる理由なんて思い当たらぬが……。

「……な、何だ？　その言い方、まるで死んでも俺だけは殺したい、みたいなニュアンスじゃないか？　そんなに一杯食わされたのが悔しかつたのか？　それとも、別な　　」

「うふふ。最後に一ついいことを教えてあげましょうか。私の本名

　　私の本名はね、ムツナ＝レーガ－って言つのよ」
　　ムツナ……レーガ－？　　レーガ－？　どこかで聞いたファミリー
　　ネームだ。レーガ－、レーガ－……ええと……そうだ！　マーレッ
　　ト＝レーガ－ってのがいた。そいつはカザミドリの十三番隊隊長で、
　　一ヶ月前に

俺が殺した

ようやく俺は思い至り、一本糸が繋がり、そこから生まれる推測
に俺の思考が硬直した瞬間

ドスリツ

俺の腹に熱い感触。

いつの間にかムツナが俺の正面に来ていて、その手にナイフを握つていて、その刃が俺の右脇腹に突き刺さっていた。

ムツナはそのまま俺の胸ポケットに手を突っ込むと、そこからトランシーバーを取り出した。そしてそれを思い切り床にたたきつける。当然のごとく、トランシーバーは粉碎。一瞬でスクランプになつた。

「うふふふ！ そうよ！ そうなのよ、『闇鳥』！ ようやくわかつた？ あなたなのよ！ あなたが私のお父さんを殺したのよ！」
かみ締めるように言いながら、ムツナはナイフの柄をぐるりと回す。

ぼたりと、俺の足元に血がこぼれ落ちる。

「あんたなのよ！ あんたが私の大切なものを、心のよりどころを、幸せを、安らぎを奪つたのよ！ あんたのせいで、私は悲しんだのよ！ 悔やんだのよ！ 全部が全部あんたのせいなのよ、『闇鳥』！」

感情に任せて叫ぶムツナ。

まるで脳を直接揺らすように、俺の脳にその声が響き渡る。
……し、知らなかつた。そんな関係性があつたなんて。
そんな繋がりがあつたなんて。

確かに、俺はムツナの父親が死んだことは聞かされた。
コロノ山のロッジの中で聞かされた。

あの時の俺は、それを何ともなしに聞いていた。

友人の不幸話の一つとして、それ以上は何も思わず聞いていた。

それ以上は、何も思う必要はなかつた。

そもそも、俺とムツナは仕事で偶然出会つただけだ。

ギーンを介して、偶然見知つただけだ。

俺は、ムツナがカザミドリだと知らなかつた。
ムツナは、俺が『闇鳥』だと知らなかつた。

そのせいで そのせいで、俺は今の今まで……

と

ズルリツ

俺の腹部からナイフが抜かれた。

俺は腹を押さえたまま、どさりと床に倒れる。

「……うふふ。どうせなら、私の手で直々に殺してあげる」

そう言って、ナイフを振り上げるムツナ。そのまま俺の脳天を目掛けて振り下ろしてくる

が、

パシリツ

さすがに素人の太刀筋。俺は左手一本でその刃を止めた。腹に痛みが走っていても、意識が朦朧としていても、来ることが分かつている華奢な女の攻撃なら片手で止められる。これくらいなら、まだ何とかなる。

「くつ……」

ナイフが止まり、忌々しい表情になるムツナ。しかし

ドゴオソンツ

ドガアンツ

部屋の隅で大き目の爆発が二回。また机が吹き飛んだ。別の『銀石』が反応したんだろう。すでに四方八方に火の手が上がっていて、もはやどこから次の爆発がくるのか分からない状態だ。

「……ふん。まあ、いいわ。どのみち『銀石』の爆発でこの周囲はみんな消え去るんだから。どうせ時間の問題よ」

「くそつ、やばい。

痛みで意識が薄れかけている。ナイフを止めるのに集中するだけで精一杯。ムツナを突き飛ばそうにも、これ以上腕に力が入らない。早く、早く他の誰かにこのことを知らせなければ。伝えなければ逃げるよう言わなければ。ここにいるみんなが一瞬で消し飛んじまう

なのに、トランシーバーは壊されたし、ここから走つていくほどの余力はもうないし。どうすれば……。

「うふふふふふふ。もう、あなたに打つ手はないわよ！ 後悔して、後悔して、後悔して、このまま死になさい！ その忌々しい『闇鳥

ドスンツ

「あやつ」

口上の途中、いきなり目の前のムツナが後方へ飛ばされた。白んでこる視界を上に向け、一体何が起こったのかと見ると、俺の眼前、そこには白髪のショートヘアードダボダボのパークーしかし、左手には木製の義手を装備した

ワイトが立っていた。

「……ワ、ワイト！」

俺は右手で腹を押さえつつ、左手で上体を起こしながら叫んだ。

「お、お前、何でここへ？」

「……何とか……間に合つた」

ワイトは首から上だけを俺の方に向け、相変わらずの静かなトンで答える。

「私は……義手が……まだ思つよつに動かせないから……この作戦には……参加……できなかつた。……マスターに……止められた。だから……方々手を尽くして……ようやく……この場所を……突き止めた。……この場所に……たどり……着いた。……私は必ず……あなたを……守る。……あなたを守るために……私は……できうるすべてのことを……する」

ドゴオオオオオオオ

またも爆発。今までよりも大きい。壁が一瞬で黒くなつた。

しかし、ワイトはまったく動じる様子もなく、俺に包帯の塊を投げてくる。

「……ここにある『石』は……研究で……変色してて……ここからすべての『銀石』を探し出すのは……私達には……至難。……

もはや……逃げるしか……ない。……ムツナは……私が……抑える。

……あなたは……これで止血して……他の皆と……逃げて

「逃げてって　　お前、左手使えないんだろ？　それであいつ

を止められるのかよ。向こうは刃物もちだぞ？」

「……何とか……止める」

眩くようこそう言ひうと、首を前に戻し、ワイトは前へと駆け出した。

相変わらずの俊敏な動きでムツナの方へ向かうワイト。

ムツナまであと五メートル　　といったところで、ムツナは懐から赤い石を取り出し、それをワイトに向かって投げつけた。

ワイトはそれをひらりと左に跳んでかわしながら、さりにムツナへと近づいていく。

ワイトがムツナの眼前に達した瞬間、ムツナがナイフを振ったが、ワイトは右手でそれを白羽取り。刃が肌に触れ血を滲ませながらも、その軌道を完全に止める。

ワイトはそのまま足を振り上げ、ムツナに蹴りを加えよとするが、ムツナは残りの左手を再び懐に入れ、今度は黄色い石を掌握。そのままワイトに投げつけた。

至近距離の攻撃で避ける術もなく、石はワイトの上体に直撃。バチチチッと電撃が走り、ワイトは片膝をつぐ。が、辛うじてナイフは止まつたまだ。

俺は思わずワイトの方へ駆け寄るひうとする。が、前足に力が入らず、ふらりと俺は床に伏した。

「……わ、ワイト」

「早く……逃げて。……いじは……私が……何としても止める……

から」

「だつて、それじゃ、お前が……」

「……私は……大丈夫」

ワイトは俺に後頭部を見せたまま、声だけで答える。

「私は、あなたにも……誰にも見限られたくない。……見限られる

のが……怖い。……だから……私は……誰も……見限らない。……

ウェリイも……ギーンも……ロットも……ルーも……そして……

……あなたも「

ナイフを受け止めている華奢な後ろ姿。しかし力強い声で、

「……あなたを守るのが……私の幸せ。……ウェリイを守るのが……

私の幸せ。……ギーンを守るのが……私の幸せ。……みなを守る

のも……私の幸せ。……みなを守る自由があつて……私はすぐ

幸せ」

……相変わらず朦朧としている俺の意識。

しかしその片隅で、俺は確信した。

誰も見限らない。

みなを守るのも私の幸せ

やはり、ワイトはボーダーラインの向こう側の人間だ。どう転んでも、こちら側には来ない人間なんだ。こちら側に来るべき人間ではないんだ。

過去の自分を悔やみ、恐れ、震え、そして泣いていた。

思えば、そんな人間がこちら側のはずもない。

どんな過去があろうとも、ワイトはずつとラインの向こう側の人間だったんだ。

ワイトが俺と共に歩む可能性はない。

お互いにどんな感情を抱いていようと、歩む道は別。

俺はやつと思い至った。

確認した。

確認した。

そして思った

ワイトには、もっと生きていて欲しい。

道を踏み外した人間を見限らなかつたのは、むしろ俺じゃなくてワイトの方だつたんだろう。

俺の本性を知つて、それでも俺の側にいてくれたのはワイトだつたんだ。

甘えていたのは俺で、甘やかしてくれたのはワイトだつたんだ。
救われたのは俺で、救つてくれたのはワイトだつたんだ。
きっとワイトなら、もつと大きな幸せを見つけることができる。
もつと幸せになれる。

だから、ここで散らせたくない。

俺はそう思い 包帯で腹の止血をしながら、ふらつく足に力を込めながら、一步一步とワイトの方へと進んでいく。
力比べ というより根比べを続けているワイトとムツナ。
俺はその背後にたどり着くと、ワイトの襟首に手をかけた。

「……え？」

それに驚きワイトの力が弱まつた一瞬、俺は現在のあらん限りの力でワイトの首筋をつかむと、そのまま後方へ投げ飛ばした。そのまま、研究所の扉から外へと投げ出されるワイト。

俺はワイトが起き上がる前に扉の方へ行き、バタンと閉めた。当然のごとく力ギもかける。

「……え？ ……ちょっと……ダルク？」

ドア越しに聞こえるワイトの声。

「……な、何するの……ダルク……ダルク！」
外からドンドンと叩きながら、声が届く。

「ダルク！ ダルク！ な、何するの！ ダルク！」
必死なワイトの叫び。

「ダルク！ ダルク！ ダルク！ ダルクーツ！」

……思えば、ワイトの叫び声なんて初めて聞いた。一年以上の付き合いでが、これが最初だ そして、最後だ。
俺はドアから離れ、ムツナの方へと進んでいった。
ムツナはナイフを握ったまま、ぽかんと
「ちょっと、何？ 何のつもり？」
「……交換条件だ」

俺はまだ收まらない腹部の痛みに耐えつつ、静かに答えた。

「お前の望通り俺は死んでやる

だから、お前も死ね」

「…………は？」

口を丸く開け、立ち忽くすムツナ。

しかし俺はそれ以上の説明はせず、壁際の棚の方へと歩き出した。そこに数十枚積んではいるのは、黒い板 恐らく『黒石』の板だろう。石ころ程度の量を手に入れるのにも苦労する『石』だつていうのに、こんな塊を何十枚も確保しているとは。つくづく、力ザミドリってのは恐ろしい集団だ。

俺はその板を慎重に 誤つて発動させてしまわないうに、慎重に持ち上げると、それをそのまま壁に立て掛けしていく。一枚、二枚、三枚と、四方を包むように隙間なく置いていく。

「…………な、何してるの？」

「バリケードだ」

俺は手を休めないまま答える。

「『黒石』で防御壁を作れば、もしかしたら『銀石』の影響を遮れるかもしれない。……天井と床まで覆うのは難しいが、ここは地上階だし、入口からの距離からして、恐らくこの上には賞金稼ぎは誰もいなはずだ。だから、横さえ塞げれば誰も死ななくて済む」

「……で、でも、『銀石』っていうのは、空間を歪めるのよ？ それを『黒石』で止められるなんて、そんな話聞いてない。そんな研究結果は聞いてないわよ。一体なんの根拠があつて

「別に、俺だつて確信があるわけじゃないさ」

俺は言いながら、入口のドアにも『黒石』の板を立て掛けた。

聞こえていたワイトの叫び声が少し弱まる。

「ただ、もしかしたらっていう可能性にかけてるだけさ。防ぎきれればラッキー。無理ならしちゃうがない。それだけだ」

「まあ、だからと言つて、考えなしにこんなことをしてゐるわけじゃないがね。」

以前、ギーンに聞いたことがある。『黒石』の特性『分断』は、

エネルギーを消し去ることによつて起じるんだと。分子と分子、原子と原子の結合のエネルギーが消えることで、ものが分断される。

だから『黒石』は刃物なんかに使うと効果を發揮するが

かし、その根源的な特性は、あくまでエネルギーを消し去ること。

もし空間を歪めるエネルギーを消し去ることができれば、『

銀石』の暴発を止めることができんじやないか？

俺はそういう予見を持つてこつこつ行動をしているのである。…

…確信がないのは変わらないが。

「……どちらにしろ、ここに『銀石』が発動した瞬間、俺達は死ぬんだ。あとはどうなつても、どつしようもないや。責任の取りようはない。とにかく、俺も死んでやるから、お前もこのバリケードを壊すなつてことだ」

俺は三十五枚目の『黒石』の板を立て掛けた。これで、四方の壁がすべて覆われたことになる。

「な、何で？」

まだ納得が言つていらないような顔で、ムツナが呟いた。

「何であなたはこんなことするの？　だつて、普通、この状況なら、私をどうにか行動不能にして、自分は仲間と一緒に逃げようつて、そういう行動をするものでしょう？　なのに、何であなたはこんなことをするの？　何でわざわざ、自分が死ぬよつた選択肢を選ぶの？」

「……別に、俺の勝手だろ」

俺は答えながら、入口のドアの前に座つた。

そこいら中の机や棚が燃え盛る音で、もはやワイトの声は聞こえてこなくなつた。

「……それよりも、もっと喜んだりうなんだ？　せつかく親の仇の俺が死ぬんだ。田の前で死ぬんだ。お前の念願が叶うんだ。お前にとつちゃあ、もう少し嬉しがる場面だらうへ」

「……う、うん」

戸惑つたように返事をするムツナ。と

ドゴオオオオオオオンツ

ドゴオオオオオオオンツ

ドガアアアアアアンツ

ドゴオオオオオオオンツ

あちこちで爆発。すでに部屋の中は真っ赤で、やたら暑く息苦しかった。……もしかしたら俺達は、窒息で意識を失うのが先かもしない。

ドガアアアアアアンツ

ドゴオオオオオオオンツ

いよいよ、『銀石』の粒の発動がひつきりなしに起じるようになつてきた。

轟音が響くたびに、ムツナが肩を震わせている。……まあ、無理もない。もしかしたらその爆発の瞬間が、自分の最期かもしないんだ。村を一個消滅させるほどのポテンシャルを持った『石』。その百分の一の大きさでも、俺達は跡形もなく消え去るだろ。

ドゴオオオオオオオンツ

ドガアアアアアアンツ

俺は爆発音を聞きながら、ため息を一つこぼした。

……俺がこんな最期を迎えて、ロットは、ルーは、どう思うだろう？ ギーンは、ウェリイは、どう思つだろ？ ラキはどう思うだろ？ アンディさんはどう思つだろ？ 笑うだろ？ 馬鹿にするだろ？ 嘲るだろ？ 軽蔑するだろ？ 泣くだろ？ 一体、俺は今まで何のために生きてたんだろう？ 何のために賞金稼ぎをしてたんだろう？ 何のためにアサシンのスキルを教え込まれていたんだろう？ 本当、バカバカしい。バカバカしすぎる

が、俺はと、

目の前、ムツナがいきなり立ち上がった。

そしてこっちに向かつて 出入り口のドアに向かつて 駆けてくる。

俺の横を通り過ぎ、そのままドアを蹴破りつとある。

俺はその襟首を後ろから掴み、そのまま地面に押さえつけた。

「は、離しなさいよ！」

「……何だよ、お前、いきなり。ドアを開けてどうするつもりだ？」

「ど、どうするつて」

ドガアアアアアアンツ

部屋の隅で爆発。それに反応し、ムツナが肩をびくりと振るわせ

る。

「だ、だつて、このままこゝにいたら……死んじゃうじゃ
ない！」

「……は？ 何言つてるんだ？ だからこその交換条件だろ」

「し、知らないわよ！ そんなの！ わ、私は死にたくないもん！」

腕に力を入れ、何とか立ち上がろうとするムツナ。

俺は全体重をかけ、上から押さえつける。

「だ、だつて、私、死にたくないもん！ 死にたくないもん！ 死
にたくないもん！」

「……死にたくないって、先に俺と心中しようとしたのはお前だろ。
それに、今さらそんな理屈が通ると思ってるのか？」

「死にたくないもん！ 死んじやだめだもん！ だつて、この命は、
お父さんがくれたものなんだもん！ 私の大切なお父さんが残して
くれたものなんだもん！」

ムツナの叫びが、段々涙声になつていぐ。

俺は嘆息しながら、

「……つったつて、お前、カザミドリとして、今まで何万人の命を
奪つたと思ってるんだ？ そんだけの人間を殺しておいて、今さら
死にたくないなんて、どうして言えるんだ」

「だつて、そんなの他人じゃない！ ただの背景じゃない！ 私の

世界には関係ないじゃない！」

他人はみんな背景。

確かにそんなことは言つてていたが。

そうか、結局こいつは、そういう理屈にたどり着くわけか。
そういう理屈で動いていたわけか。

そういう理屈で、カザミドリに組してたわけか。
こいつの言い分、何となくは分かるが、納得はできない。
納得はできないが、何となくは分かる。

因果なもんだ。俺も、こいつも。

最期の道連れがムツナだなんてどうかと思うが　いや、俺
にはちようどいいのかもしない。これも因果なのかもしない。
血が足りないのか、酸素が足りないのか、いよいよ頭がくらべら
してきた。

いつの間にか、下のムツナは動かなくなっている。意識が飛んで
しまったのだろう。

俺もそろそろだ。

あと何秒、俺の意識はもつだらうか。

カウントダウンが聞こえてくる。

とにかくみなさん、さよなら、さよなら、さよなら、さよ
うなら、さよなら、さよなら、さよなら

さよなら。

.....
.....

と

「 火炎斬鉄 ！」

いきなり、壁越しに聞こえてくる声。
直後、入口のドアが破かれ、立て掛けであった『黒石』の板が俺
の方に吹き飛んでくる。

俺は思わずそれを避けた。見ると、『黒石』の板の下の床が粉々
になつてゐる。『黒石』の性質は『分断』。つまり、その表面にぶ
つかれば粉々になるということで、もし俺が避けてなかつたら、俺
の体は……

「ダルクー！ 無事かー？」

「お前に殺されそうになつたわ！」

俺は思わず突っ込んだ。……いや、もとい、

「ロット、お前、何でここに？」

「いや、ピンチの香りがしてな。参上してやつたぞ」

「そりや、どんな香りだよ。……つか、ここじや『銀石』が暴発してるんだ。なのに、お前、せっかくのバリケード壊しやがって」

「ふむ。それはワイトから聞いた。大丈夫だ。心配はいらんぞ」「心配いらんて、一体」

と、いきなりロットの横から部屋に入ってきた人影。青い銃を右手に握った、青いロングヘアの女の子 ルーだ。

ルーは炎を避けつつ、机の上のビーカーを手に取る。そしてその中を睨みつつ、その中身を『サイキ』の中に詰め込んでいく。

「お、おい！ ルー！ 何してるんだ？」

「んー？ 『銀石』を集めてるの」

「『銀石』つて……ここにある『石』は、研究途中で色々変色してるんだ。どれがどれだか分からぬのに、お前、分かるのか？」

「まーねつ。これでも科学者はしくれだから」

そう言いながら、ルーはぼいぼいと『石』を判別していく。

……もし一緒に『赤石』なんかを入れようもんなら、すぐさま大爆発を起こしそうなもんだが。しかし十数個のビーカーをひとつくり返してゐるのに何も起こらないのは、識別がうまくいつてることなんだろうか。

鼻歌でも歌いそつなノリで四方の棚を回つていぐルー。そして数分後、

「うん、これで全部だね。……じゃあ、窓開けて」

「了解」

言いながら、ロットが『黒石』の板をどかし、閉め切つていた戸を開け、窓を開け放した。

差し込む太陽光。久しぶりに見たような気がする、晴れ渡る青空。遠方に山がうつすら見えるだけで、眼下には緑色の平原しか見えない。

ルーはその窓の外へ『サイキ』の銃口を向けると、そのまま引き金を引いた。

ズドンッ

発射される弾。

コルート博士の設計通り、『銀石』は暴発しなかつたみたいだ。
『サイキ』の銃口から続いて、青空に軌道が描かれる。
そして数秒の後、

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ

まるで花火のように、空にキレイな閃光が瞬いた。

カザミドリ壊滅のニュースは、瞬く間に全世界に広がった。

それはそうだろう。全部で七つの町や村を消し飛ばしたせいで、その存在はすでに世界中の人に知れ渡つてたんだ。一体いつ自分の居住区が狙われるのか、そんな不安を人々に抱かせていた。このところの、世界中の人都の第一の関心事項だったんだ。

そして、その不安が一気に取り除かれた。

取り除いたのは、ギルドに属する賞金稼ぎ達。

今まではただの便利屋か、もしくは粗野な用心棒くらいにしか認知されていなかつた賞金稼ぎが、この業績のおかげで少しばかり見直され始めたらしい。賞金の相場が数十ドル上がつたところもあるそうだ。懐が厳しい新米にはありがたい話だろう。ロットやルー達にとつても、この上ない朗報である。

しかし、俺にはもう関係ない。

俺はもう、ギルドに足を踏み入れない。賞金稼ぎを名乗らない
そう決めたんだ。

しかし、そんな決心を抱えながらも、カザミドリ壊滅作戦の後、俺は一旦アステルに帰つてきた。別にそこまで急かなければならぬような状況でもなかつたし、それにまだ何も準備をしてなかつた。家のことや大きな荷物に関してはラキなんかと話し合わなければならぬだろうが、それ以外にも旅支度はせねばなるまい。この家に一度と戻らない可能性だつてあるんだ。適当に済ませるわけにもいかないだろう。ちゃんと考えなきゃならない。

そんなわけで、俺は他のメンバーと共にアステルに戻つた。
そして、我が家で一晩休んだ。

次の日の午前中は、両親の墓参り 加えて、ヒューミッドを討つことの報告 をしたロットに付き添つた。ロットは十分以上、墓の前で手を合わせたまま黙り込んでいた。俺の知る限り、寝てる

とき以外で（いや、就寝中だつてたいがいいうるさいものだつたが）、ロットが沈黙を保つた最長時間だ。そんなに長い間一体何を思つていたのか、何を伝えていたのか、俺は別に聞いたりはしなかつたが。午後にはクルート博士が町に帰つてきて、ルーと数年ぶりのご対面。そこに居合わせた俺は、再び喜び泣くルー一家を眺めることになつた。ルーの母親が一緒にお祝いしようと夕飯に誘つてくれたのだが、俺は遠慮した。久方ぶりの家族水入らずを他人が邪魔するのも悪いだろう。とりあえず俺は「おめでとうございます」とだけ言つて、そそくさとルーの家をあとにした。

とまあそんな風に、その日は一日完全に潰れてしまつた。

いつものようギルドへ次の仕事を探しにいこうと、俺の家にまで迎えに来たロットとルーと道を歩きながら、俺はよひやく

「……なあ、ロット、ルー。ちょっと話があるんだが

と、切り出した。

一応、言わないで行く という選択肢もあった。その方が変に気を揉まなくて済むだらうし、色々とスムーズに行くだらう。しかし内情が内情だ。これからのことを考えれば、特にこの二人には俺に関するすべての情報を秘密にしておいて貰う必要がある。きちんと頼んでおく必要がある。別に二人を信頼してないわけじゃないが、面と向かってちゃんと伝えておいた方がいい。

だから俺は、周囲に他の誰もいないのを確認しつつ、言葉を続けた。

「あのね…………俺はもう、ギルドに行くつもりはないんだ

「何だ？ 急にどうした？ 五月病にでもかかったのか？ ……ま

つたく、仕事にかける熱意が足りとらんのだ。そんなんでは後世に名を残すなど、夢のまた夢だぞ。むしろ末代までの恥さらし者として語り継がれてしまう

「……言つとくが、俺は一度も後世に名を残したいなんて言つたことはないぞ。それはお前の目標だろ。俺まで巻き込むな。……つか、話の腰を捻じ曲げるな。まじめな話なんだから。ええと、だから、俺はもうギルドを辞めるんだ。辞めて 暗殺者『闇鳥』として生きていくことにしたんだ」

「は？」

「へ？」

きょとんとした顔で、ロットとルーが振り返ってきた。
「何だ？ どうした？ この前の仕事で、いよいよ自信がなくなつたのか？ ……まあ、無理もない。あんな情報屋の小娘一人を、三人がかりのフォローがあつてようやく捕まえるにいたつたんだからな。自分の能力がいかに未熟かを思い知らされただろ？ ……しかし、お前もまだ十六だ。アリンコの眉間程度にはまだ伸びシロもあるだろう。だから諦めず精進して」

「違う！ つか、失礼なこと言つくな！ イヴ相手にてこずつてたお前を助けてやつたのは誰だと思ってるんだ！ 俺はそこまで落ちぶれてない！ ……というか、頼むから話を進めさせてくれ。つまりだな、俺は元々暗殺者としてのスキルを磨いていた人間で、『闇鳥』なんぞと呼ばれてたつてのは話しただろ？ そしてこの前のこととで他の数人の賞金稼ぎにもこの事實を知られちまつた。だから、俺はギルドを辞めるんだ」

「は？」

「へ？」

再びきょとんとするロットとルー。

ロットが首を傾げながら、

「お前が『闇鳥』であることは分かつてゐるが
何でお前がギルドを辞めるんだ？」

「いや、だから、当然だろ？ ……」

俺はがっくりと肩を落としながら答えた。

「暗殺屋が普通に仕事ができるわけないだろ？ 俺はいつか、暗

だからつて、

俺はがっくりと肩を落としながら答えた。

殺稼業で食つていくことになる。その時に、俺の素性がバレてるのはまずいんだ。だから、それが公になる前にそれを隠す必要がある」「しかし、この前のカザミドリ壊滅作戦では、アンディさんが根回してくれたおかげで、必要以上にその秘密は広まらなかつたのだろう？ 知られたのは、三、四人の上級賞金稼ぎのみだ。カザミドリの残党も誰一人取り逃がさなかつたらしいし。秘密は守られてるのではないか？」

「いや、万が一つてこともあるだろう？ 特に残党を全員捕まえた

かなんて、百パーセント把握しようがないんだから」

「すると、何か？ お前は、アンディさんの力量を疑つているとうことか？」

「い、いや。そういうわけじゃないが……」

話が変な方向に転がり、俺は思わず言い淀んでしまう。

「……つか、俺は言うなれば人殺しなんだ。そんな人間が、大っぴらに仕事ができるわけないだろ？」

「別にお前は、まだ踏み外したわけじゃないだろう。カザミドリの人間など、元々デッドオアライヴの賞金首だつたわけだし、な」

「それはそうだが…………それにしても、だ。問題は、俺は人に向かつて思慮なく、考慮なく、遠慮なく、躊躇なく刃を振り下ろせる人間だつてことだ。俺は今までそういう風に仕込まれてきた。俺は立ち止まらないんだ。立ち止まれないんだ。俺にはそういうストップバーがないってことなんだ。普通の人間にはあるものが、俺にはないんだ。当然のようにあるはずのものが、まるで当然のように俺の中には存在しないんだ。たとえ今はまだ賞金稼ぎの範疇の中で済んでも、それは運がいいか、機が熟していないだけ。問題がないわけじゃない。解決されてるわけじゃない。何の保障もない。これからのこととは分からぬ。……いや、済まなくなる可能性の方が高い。分かるだろ？」

俺は話を俺のペースに戻そと、説明を続ける。

「目の前に死体があろうが、血しぶきが上がろうが、断末魔が上が

ろうが、俺は何も思わない。何とも思わない。刃を振るう。刃を振り続ける。人を殺して後悔している人間に、俺は共感できない。その気持ちが分からぬ。分かつてあげられない。そういう人間なんだ。そういう道の上を歩く人間なんだ。一線を越えた人間なんだ。ボーダーラインの向こう側の人間なんだ。お前らとは違う。違います。だから俺は

「ふん、ダルク、お前」

ふいに俺の言葉の途中、ロットが鼻で笑いながら俺の方を見やり、

「よほど人殺しに戸惑ってるんだな」

「……へ？」

「……俺が戸惑ってる？ 人殺しに？ ……いや、何を言つてるんだ？ それは、逆だろ？ ……」

「毎度ながらのお前の非生産的な話だが、今日はこと長つたらしくて敵わん。『自分はギルドを辞めるべき』。その結論を見つけるために、よくもまあ、それだけの言葉を尽くしてくれたものだが。：逆に言えば、お前はそれだけの言葉を用いなければ、そういう結論にたどり着けないということだろう？ 『自分はギルドを辞めるべき』だと言い切れないのだろう？」

…………。

「結局のところ、お前が笠に着ようとしている理由は、どれも不十分だということだろう。現時点では決断の根拠にするには足らない。アンディさんがお膳立てしてくれたおかげで秘密はある程度守られているし、お前はまだ人の道を踏み外してはいないしな」

「人の道を踏み外していないって、しかし、俺の内面にはそういう要因が」

「要因など、私の知ったことではない。言つただろ？ 私は結果しか見ないので。結果しか認めないので。結果しか求めないので。

現在の結果では、お前はまだこちら側だ。それ以上でも以下でもな

い。それ以外の何ものでもない。それ以外は、私は知らない。私は関係ない。……ふん。結局、問題は簡単だろう。単純だろう。ようは、一言で済む。ワンクエスチョンで済む。ダルク、お前は

賞金稼ぎを続けたいのか？」

いつもの底抜けた声で、ロジトはあっけらかんと俺に問いかけてきた。

突然の質問。

問われて、俺は考える。

考える、考える、考える。

考え込む、考え込む、考え込む。

……俺が、賞金稼ぎを続けたいか？

俺は、『賞金稼ぎ』をどう思つてる？

俺がギルドに登録してから今までの、一年ちょっととの期間。そこまで長くはないが、しかし決して短くもない。

どんなことがあったつけ。

どんな人にお会つたつけ。

どんな時間を過ごしたつけ。

楽しかったこともあった。おもしろかったこともあった。つまらなかつたこともあった。退屈なこともあった。

悩んだこともあった。苦しんだこともあった。

呆れたこともあった。怒りを覚えたこともあった。

悔しかつたこともあった。後悔したこともあった。

死にかけたこともあった。疲れ果てたこともいくつもあった。

そんな出来事を、ロジトとルーと一緒に駆け抜けてきた。

果たして俺は、これから

『どうしたいんだろう？』

……よく、分からぬ。

分からない、分からない、分からない。

考えが巡るだけで、答えが出ない。

俺は、一方で自分を暗殺者と認識しながら暮らしてたんだ。

そんな単純な日々ではなかつたんだ。

そんな単純な問題じゃない。

そんな簡単な問題じゃない。

俺の中では、なかなか結論が出ない。

結論が出せない。

何も言えない。

俺は答えあぐね、黙り込んだ。

黙り込んでしまった。

しかし しかし、なぜかロジトの中では、俺の中よりもあ
つさりと、迅速に、シンプルに結論が出たらしく

「 ほれ、早く行くぞ」

と言つて、俺に背を向け歩き出した。

ふと、俺の顔を楽しそうに眺めていたルーが、「うふふ。そりゃあ、ダルクの心の中は、ダルクにしか分からないんだろうけどさあ……でも、今までずっとチームを組んできて、ダルクを別な世界の人だなんて一度も思ったことはないよ。あの時、ダルクがムツナと一緒に死のうとしたのも、その重大さを理解してたからじゃないの？ 少なくともムツナよりは、それをちゃんと受け止めてたからじゃないの？ ……それにせ、ダルクが本当はどんな人間でも、今まで私達が一緒に仕事をこなしてきた事実は覆せないんだよ。時間は巻き戻せないんだよ。うふふ。ダルク、あなたがどんな人間でもね

あたしは愛してるよ」

両手を背中越しで組み、はにかむように言つてくるルー。

そしてぐるりと振り返り、ロットを追つて歩き出した。

俺の前を進んで行く二つの背中。

赤い短髪と青い長髪。

俺もその後を追おうとして ふいに、頬のむずがゆい感触に気付いた。

手の甲でそれを拭うと、それは 涙。

何でまた と俺は一瞬戸惑つたが、すぐに分かった。その涙の意味を理解した。

そうか。俺はこの二人と一緒にられて、嬉しかったんだ。

いつも文句ばかり言つて、呆れてばかりいて、ため息ばかりついていたけど、結局はそういうことだつたんだ 文句ばかり言つて、呆れてばかりいて、ため息ばかりついていたにも関わらず俺がこの二人とチームを組んでいたのは、そういうことだつたんだ。

俺は両手をござりと拭つた。

そして、二人の背中を追いかけていく。
はぐれないようについていく。

『闇鳥』ことこの俺、ダルク＝アーシムは、もう少しだけ、このはた迷惑な厚顔無恥男ロットと、能天氣で天然無邪氣な少女ルーと共に、

泣いて、
歌つて、
飛んでいくことにした。

あとがき

といつことで『闇鳥のナキカタ』及び『闇鳥シリーズ』の完結と
あいなりました。

このシリーズの第一作、トビカタは、式織が生まれて一つ田に書
いたものとして、まさかここまで続けるとは当時（一年ちょっと前
ですが）思っておりませんでした。実は、トビカタを書き終えた段
階では、このお話は「テッドエンド」（Wetted White）だったのです
が、その後思い直しこのような結末になりました。

ナキカタ単体としましては、異世界ファンタジーでミステリチッ
クなことをしたのが、果たしてアリなのかナシなのかが悩みました
が、まあ、趣味の範疇ですし、これくらいはいいかな、と。
とともにかくにも、長々とお付き合っていただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3950e/>

闇鳥のナキカタ

2010年10月8日14時24分発行